

503

125

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 ¹⁹/₁₀ 1 2 3 4 5

始



191

503-125

1043

愛と智慧との言葉

愛と智慧との言葉

トルストイ著
小川龍彦譯

東京 洛陽 堂

大正
11. 8. 4
内交

トルストイ序

此等數冊の格言は婆羅門教、儒教、佛教等の源泉、福音書及傳道書並に古代近代兩者の無數の思想家達の著作物から集成された種々の典據を有するものである。

此等格言の大部分は自分が翻譯するか、書き直すか、どちらかしたゝめに、幾分の變化を受けてゐる、それ故に此等原著者の署名の下に印刷する事はむしろ都合の良い事ではないのである。

又署名のない格言の大部分も、その源泉は世界の最大の聖人の心内にあるもので、自分に據り處を持つものではない。

前 言

○ 本書はトルストイの“*The Pathway of life*”の英譯からの翻譯である。

○ 今、「愛と智慧との言葉」と改題した。

○ 本書に収録したのはその殆んど二分の一である。各篇、全く獨立したものである。これのみにも、立派に獨立したものと見て良い。しかし、後半をも近く出版する豫定である。洛陽堂と共にこの事を約して置く。

併せて読んで貰へるとうれしい。

○ 譯文に就いては何も云はないが、一見、廻りくどく、ひつこいのは——そしてそれがまゝ日本語にすると難解解澁な感じを與へる——原文のせいである。
 そんな處も讀み返して貰へばわかると思ふ。若し、誤りでもあつたら、御注意下さると有難い。

○ 出版に當り、つゝしんで、いろ／＼本書の事で御助勢下さつた先輩諸氏に厚き謝意を捧ぐ。

大正十一年六月

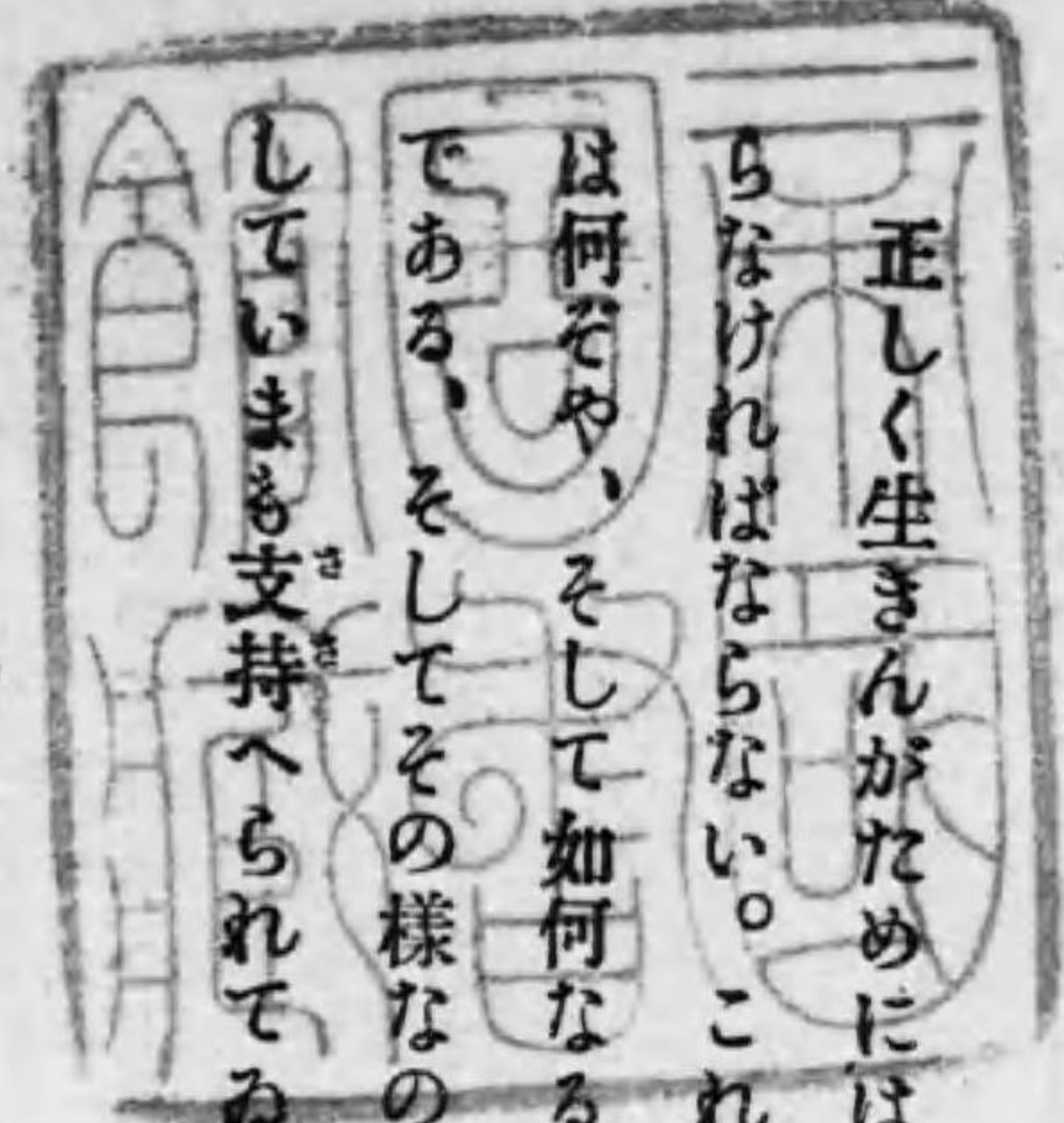
譯者

目録

トルストイ序	一
前言	三
信 仰	一
神	二六
靈	五
總てのものに一つの靈が在存する	八
愛	一三
罪、誤謬及迷信	一五〇
過 多	一七

性	慾	二〇二
婚	姻	二二六
怠	惰	二二九
貧	慾	二六〇
忿	怒	二八六
傲	慢	三三三
不	平	三三九
力	三五〇
罰	三八九
虚	榮	心
虚	偽	の	宗
教	四四五

信 仰



正しく生きんがためには、人は、爲すべきものと、爲してはならぬものとを、知らなければならぬ。これを知るためには、人は信仰を要する。信仰とは、人々とは何ぞや、そして如何なる目的を以つて人々が地上に生存するか、に就いての智識である、そしてその様なものが、凡ての理性ある人々によつて、支持へられて來、そしていまも支持へられてゐる信仰である。

眞の信仰とは何であるか

一、正しく生きんがためには、この人生に於て、何をなすべきか、そして何をなしてはならぬかを會得することが肝要であると同様に、人生とは如何なるものであるかを會得することが肝要である。之等の事柄は始終凡ての種族の最も賢明な最善な生活者達によつて教示へられて來た。全てこれらの賢者等の教示は、大抵は、一つに一致する。人の生命とは何ぞや、そして如何にして夫れを生くべきか、とに關する、全ての人々に共通であるところの、この一個の教示が、眞の信仰なのである。

二、如何なる方向にも制限のない、夫れの初めや終りは私にとつては未知に等しい、この地上は何であるか、そしてこの無限界に在るわが生とは何であるか、そして如何にして、私はそれを生くべきか？

信仰のみ、これらの質問に應へることが出来る。

三、眞の宗教は、全ての人類の制作つた法則の上にあるかの法則を知るにある。そして夫れが、地上に住んでゐる全ての人類に對する唯一の法則である。

四、數多の虚偽の信仰が、あるかも知れない、しかし一個の眞理のみが存在する。

カ
ン
ト

五、若し汝が汝の信仰を疑惑ふならば、夫れは最早信仰ではない。

汝が、汝が信じてゐるものが、眞理では無いのではなからうかと云ふ一つの想念さへ隠匿さない時にはじめて信仰は、一の眞の信仰となる。

六、こゝに二つの信仰がある。一は、人々によつて言はれたことに、確信を置くものである——これは一個人に於ける、或は數個の人々に於ける、信仰である。そのやうな信仰は多數に、そして多様にある。

そしてこゝに、已れをこの地上に送りし神への信頼の中なる信仰がある。これは神に於ける信仰である。そしてその様な信仰は萬人にとつて一つである。

眞の信仰の教義は常に明瞭にして單純である

一、信仰を持つと云ふことは、何故それが其の様に存在か、何がそれから顯はれて來るかを訊ねることなくして、我等に啓示されたところのものを、信することである。それは我等に、我等の實相と、そしてそのために、我等は何をなすべきかを示す、しかし乍ら、我等がもし、我等の信仰が我等に爲すべく命じたものを爲すときも、夫れは、結果が如何に成るであらうかを、我等に語らない。

若しも私が神を信じてゐるならば、神への我が奉仕の結果が如何になるであらうかを私は訊ねる必要がない、何故ならば、私は神が愛であることを識つてゐる、そして愛からは善以外の何者をも放射しないと云ふことを識つてゐるから。

二、人生の眞實の法則と云ふものは、人々が法則に就ての辯疏の愚昧によつて、彼等の不幸なる人生を言譯しやうと索むることが不可能な程、そんなに單純で明瞭

で、理解し易くある。若しも人々が眞の人生の法則の反對に生きやうとするならば彼等のために残された、なすべきたゞ一事が有る。彼等の理性を放棄することである。そして之れは正確に彼等が爲すところのものである。

三、或者は言つてゐる、神の法則の成就是困難であると。之は眞實ではない。人生の法則は、我等の隣人を愛することを除いては、我等に何事をも要求してゐない。そして愛することは難かしくはない、反つて娛しくもある。

スコボロダ

四、人が眞の信仰を識るやうに成つて來た時には、彼れは宛然かも暗い部屋で、洋燈に火を灯してゐる人のやうである。全ての物が鮮明になつてくる。そして歡喜が、彼の魂に浸潤んでくる。

真の信仰とは神と汝の隣人を愛することである

一、「我、汝らを愛せし如く、汝ら相愛すべし、相愛せば萬人は汝らがわれの弟子達なるを識るべし」と基督は言つた。「若し汝ら愛し合へるならば」ではなく「若し汝ら是を、或は他を信するならば」とは、彼は言はなかつた。異人種や、異つた時代に於ける信仰は、違つてゐるかも知れない、しかし愛は、永久に而して萬人に、唯一であり同じである。

二、真の信仰は一つである——生きてゐる者全てを愛することである。

コルドヴァのイブラヒム

三、愛は人々に幸福を授ける、何故なれば夫れは人と神とを結合させる。
四、基督は人々に、現世に於ける永遠の生と未來とは同一ではないと云ふこと、しかして見へざる永遠の生は我等の内部に、いま正しく住んでゐると云ふこと、そ

して我等が、その中で萬物が動き、彼等の實在を持てる精霊、即ち神と、一體となる時に、我等は永遠の生に到達する、と云ふことを啓示した。我等は單に愛を通じてのみこの永遠の生に到達することが出来る。

四

信仰は人生を導く

一、眞實に人生の法則を識つてゐる者は、たゞ、彼が人生の法則として尊敬してゐるものを爲すのみ。

二、全ての信仰は、單にこの質問への返答である。人々の面前ではなくて、我を地上に送つた神の面前にて、我は如何に地上で生くべきか？ との。

三、眞實の信仰に於ては、單に本質的である一事を除いては、神に關して、靈魂

に關して、過去又は未來に關して、興味深く語り得ることは重大ではない。現世に在つて汝は何を爲すべきか、そして何を爲してはならぬか、を確然と識ることが重大である。

カ
ン
ト

四、若しも人が幸福に生きることが出来ないならば、それはたゞ、其の様な人は信仰を持たないからである。これは多分凡ての國民の場合も等しい。若しも國民が幸福に生きることが出来ないならば、それは只その國民が、その信仰を失つてゐるからである。

8

五、人の生涯はたゞ彼が人生の眞の法則を會得する時、善悪が決する。人が人生の眞の法則を鮮明と會得ればしる程、彼れの生涯は善くなつてくる。彼の了解が曖昧であればある程、彼の生涯は悪くなつてくる。

六、罪業と惡徳と不幸との泥濘、彼等が棲んでゐるそのところから逃れんがため

には人々は、たゞ一つの事柄のみが必要である。目下ではなくて日常の生活で——各人によつて夫々——一つの法則と一つの目的とを充分に認識つて、彼等の生きて行くに相違ない場所の、一つの信仰を要する。それからたゞ人々は、主の禱の言葉を繰返して居ればよい。「爾曹の王國は近づきぬ。夫が天に在る如く、爾曹は地上にて成し遂ぐるを得べし」と。神の國が確かに地上に降臨するであらうことに希望を懷けよ。

マ
ツ
ジ
ニ

9

七、若しも如何なる信仰でも、我等が永遠の生の爲に現世を斷念しなければならぬと云ふことを教示するならば、夫れは誤まれる信仰である。永遠の生の爲に、現世を斷念することは不可能である。何故なれば悠久なる生は既に現世の内部に在るから。

ヒ
ン
ヅ
ウ
ー
の
哲
學

八、人の信仰が強ければ強い程、彼の生涯は堅固である。信仰なき人の生は、獸物の生涯である。

五

誤まれる信仰

一、生の法則は、即ち神と汝の隣人とを愛することは、單純で明瞭である。各人は理由を獲得て、彼の心に夫れを認容める。それ故、それが誤れる教示でないとしたならば、凡ての人々は此の法則を遵守するに相違ないだらう。そして神の國は地上に君臨するに相違ないだらう。

しかし乍ら誤れる教示は、常にそして如何なる場所に於ても、神ではなかつたものを神として認容める様に人々に教示て來た。そして同様に神の法則として。で、

人々はこれ等の誤れる教示を信じてゐた。そして人生の眞の法則から、神の眞の法則の實踐から離れてゐた。そしてこれは彼等の人生を、忍耐するにはより困難にそしてより不幸に爲した。

されば人々は、神と汝の隣人とに就ての愛とは一致しない、如何なる教示をも信じてはならない。

二、或る信仰は古いと云ふ理由からして、それ故それは眞實であると考へてはならない。これとは反對に人々が長生すればする程、より鮮明と彼等は人生の眞の法則を握む。我等の時代に於て、我等が我等の祖父や我等の曾祖父が嘗つて信じた同じ事柄を信じなければならぬ、と云ふことを考へることは、汝が大人の狀態に成長した時、なほ汝の子供達の衣服が、汝に適ふかもしれないと、考へることである。

三、我等は我等の父達がいつも信じてゐたものを、我等は最早信することが出来ないことと云ふことから攪亂されてゐる。我等は、これをして我等を攪亂さしめてはな

らない。で、我等の父達が彼等の信仰を信じた様にそれ程固く、我等が信ずることが出来るその様な信仰を、我等の内部に樹立すべく、代りに試みなければならぬ。

マルチノー

四、眞の信仰を知らんが爲めには、人は先づ暫らく自身の盲目的に信じ來たつた信仰を棄てねばならない。そして次に自分の理性の光に照して子供の時から教へられて來た凡てのものを吟味しなければならぬ。

五、或る日都會に住んでゐた一人の労働者が自身の労働を終つて家路を歩んでゐた。彼が雇はれてゐた處を去らうとしてゐた時に、一人の見知らぬ人に出會つた。そしてその見知らぬ人は云つた。

「一緒に行きませう、私達は同じ場所にゆかなければならないのですが、私は道をよく知つてゐます」その労働者は信じた。そして彼等は一緒に歩きだした。

その労働者がいつも町に入る時の習慣となつてゐる道と違つてゐることに氣付い

た時には、彼等はもう一二時間も歩き廻つてゐた、それで彼は云つた。

「正しい道ではないらしい」と。

その見知らぬ人は答へた、

「これが唯一の本當の道で又一番近い路なのだよ」

労働者は彼を信じ、そのまゝ彼について行つた。然し彼はゆけば行く程、その道の間違つてゐることが解つた、そして歩行はいよゝゝ困難になつた。彼は自分を支へるために自分の所得の全部を費すより仕方なくされた。しかも家に達することは出来なかつた。けれども彼は先にゆけば行く程、彼は益々強く自分は正しい道の上にあると云ふことを信じた。そして到當自分でもさうだと確信するに至つた。何故に彼がそう確信するに至つたと云ふ理由は、彼は引返したくなかつたからである。そして常に何時かは自分の目的地に自分をつれて行つてくれるだらうと望んでゐたのである。けれども彼等は家から非常に遠く離れてゐた。そして永い事不幸に苦し

められた。

神と神の法則に關して自分達の内にある精神の聲に耳を傾けずして他人の聲を聞くところの人は皆かくの如きものである。

六、神を知らないことは惡である。然し神でない處のものを神と認むることは尙一層惡である。

六

外物崇拜

一、眞の信仰は世界の凡ての人々を利するか一つの法則を信することである。

二、眞の信仰は靜寂と孤獨に於てのみ心に入り込むものである。

三、眞の信仰は常に善き生活をなしあらゆる人を愛し、あなたが他人に求むる如

く他人になすことにある。

この事が眞に、本當の信仰である。これが凡ての眞に賢い人々と聖き生活を送つた人々が國民の中に教へ來たつた信仰である。

四、耶蘇はサマリヤ人に「汝の信仰をユダヤ人の信仰のために棄てよ」とは云はなかつた。又彼はユダヤ人にも「サマリヤ人と一つになれ」とも云つてはゐなかつた。然し彼はユダヤ人にも、サマリヤ人にも「汝等は一様に誤つてゐる。」と云つた。ガリシムも、エルサレムも何らの役には立たない。時は來るだらう、否時はもう既に來たのだ。人々が父をガリシムやエルサレムに於て拜せず、眞の禮拜者の父を靈に於て眞理に於て拜する時は既に來てゐるのだ。かくの如きものこそ父が求め給へる禮拜者なのである。

耶蘇はエルサレムの日にかやうな禮拜者を求めてゐたのだ。彼は今もなほ彼等を探し求めてゐるのである。

五、ある主人が一人の勞働者を持つてゐた、彼は主人の家に住つてゐた。そして毎日幾回となく面と向ひ合つて主人を見た。彼は少しづつ自分の仕事を怠けだした。そして終には何も仕なくなるまで怠ける様になつた。主人はそのことに氣附いたが、何も云はなかつた。そして唯彼と顔を會はせた時は何時も顔を彼れから外そむ向けた。彼は主人が自分に満足してゐるのだと云ふことを知つて、そして彼は働こうとはしないで主人の寵愛を恢復しやうと試みた。彼は主人の友達や知人らを探しだして、そして主人が彼れどの怒を解いてくれる様に仲裁して欲しいと云ふことを依頼した。

主人はこのことを知つて、そこで彼を呼んで「なぜお前はお前のために仲裁する人を求めてゐるのか、お前はいつもお前と一緒に私をもつてゐるではないか、用事のあることは何でも面と向ひ合つて言ふことが出来るではないか」と云つた。然し彼は云ふべきことを知らなかつた。彼は立ち去つた。それから彼は新しい策計を思ひついた。彼は主人の所有物なる數個の卵を集め主人の鶏の一羽を捕へ、そしてこ

れ等を主人の憤怒を換へるための贈物にした。そこで主人は云つた「先にはお前は自分のために何でも自由に云ふことが出来るにも關らず、お前のために言譯をしてくれる私の友達を探した。次には贈物を以つて私の機嫌をとらうと企てた。然もお前の有つてゐる凡てのものは、すべてに私の物である。たとへお前が本當のお前のものであるものを持つて來たとしても、私はどの贈物もとらうとはしない」と。そこで彼は新しい計劃を採つた。彼は主人を崇むる歌を作つた。そして主人の窓際に立つて大聲に叫び、彼の主人を偉大にしてこの上なき廣大なる全能なる父、哀み深き恩人と呼び乍ら彼の歌を歌つた。そのとき主人は彼を今一度呼び寄せて云つた。「お前は嘗て他人によつて私を宥めんとし、次には私の所有物の贈物をもつて來た、そして今度はより馬鹿な企をやつてゐる。お前は私が全能で慈悲深い等と兎や角云つて私のことを叫び歌つてゐる。お前は私に就いて歌つたり叫んだりしてゐる。然しお前は私を知らない、又知らうと欲してゐる様にも思はれない。私はお前

のために他人の辯解を必要としない。又贈物も、お前が知ることの出来ない事に關する讚辭も不必要だ。私がお前に必要とする凡てのことはお前の勞働なのだ。

神が我々に求め給ふ凡ては善き仕事である。

この中にこそ神の全法則がある。

七

善き生活のための報酬の觀念は眞の信仰と縁なきものである。

若しも單に人が自分の宗教上の修行の成滿のために、あらゆる種類の外部的な未來の報酬を豫期する處からある宗教に歸依するならば、それは信仰ではない。それは打算である。すべての場合に於て誤れる打算である。それは過まれる打算である。なせなら眞の信仰は唯現在に於てのみ祝福を齎らすものであつて未來に於ては何ら

の外部的なる祝福を與へもしなければ、與へることも不可能である。ある人が勞働者として雇れやうとして出發した。そして彼は勞働者を雇ふべく求めてゐる二人の仲介者に會つた。彼は仕事を探してゐたことを彼等に告げた。そこで二人は各自主人のために彼を雇入れ様と勧誘した。

その一人は云つた。

「私の主人の處へ來給へ、なせならば主人の處はいゝ處だから、勿論、君が主人を喜ばせることがないならば、主人は君を散々打つて獄舎に入れるだらう。然しも君が主人の氣に入るならば、これ程いゝ生活をもつことはないだらう。君の勞働が終つた時には、君は働かずに、酒や珍味の欸待を以つて備へられた限りなき饗應を娛み乍ら暮らせるだらう。唯主人を喜ばせることを工夫するのだ。そうすれば君の生活は言い知れぬ驚く可きものとなるだらう。」

こう云つて仲介者の一人は勧めた。

他の介仲者も亦自分の主人のために働くやうに勧誘した。然し彼の主人がどう報ゆるかは彼に語らなかつた。又彼が何處で而もどんな生活をするか、彼の勞働が難かしいか易いかどうかさへも告げなかつた。然したゞ彼の主人は罰などを課さない善良な人であることと、自分の雇人と共に住んでゐることをのみ語つた。

そこでその男は第一の主人に就て斯ふ考へた。

「彼は少々約束が多すぎる。公平に云つてもそんなに多くの約束をすることは不
必要だ。愉快な生活の約束によつて誘引されて、私は自分が慘めに放り出されるの
を見ないとも限らない。主人は疑もなく非常に嚴酷である。なせなら彼が云ふ様に
する事を過ればきつく罰するのだから。私は寧ろ第二の主人の處へ行こうと思ふ。
なせなら彼は何にも約束はしないけれども、親切で、自分の雇人と共に住んでゐる
と云つてゐるから。」

同じことが宗教的教訓に就ても眞實である。ある教師等は脅しで以つて怖れさ

せ。嘗て誰も見たこともない他界に於ける報ひの約束を以つて欺つて善き生活にと
人々を誑かしてゐる。又他の教師達は、生活の原則なる愛が人間の靈魂の中に生き
てゐてそれと一つになるものが幸福であると云ふことを教へてゐる。

若しも君達が永遠の祝福のために神に奉仕するならば、君は神に奉仕するのでは
なくて、君自身の目的に仕へてゐるのである。

眞と偽との間にある主な相異はこれである。偽の信仰に於ては人間は自分の奉仕
と祈禱とを以つて彼に報ゆるべく神に望むものである。眞の信仰に於ては人間は一
つのことだけを求めるものである。即ち如何にして神を喜ばすかを知るために。

八

理性は信仰の原理を證明する

一、眞の信仰を知るためには、理性の聲を抑へる必要はない。之れに反して理性は、我々が宗教の教師達から教へられたものをそれによつて吟味するために浄化され活用されなければならない。

二、我々が信仰に至るのは理性によつてではない。然し理性は我々に教へられた信仰を吟味するには必要である。

三、君達の信仰から皮相的なもの、現世的なもの、眼に見えるもの、感覺に觸るゝものの凡てを除去することに躊躇するな、又同様に錯雜してゐるもの、明るみを缺くものの凡てを除去することを恐れることはない。君達が精神上の精髓を益々より浄化すればする程、君達は彌々鮮明はつきりと人生の眞の法則を明確に把握し得るだらう。

四、その周囲の人々の、信する凡てを信じない人が信仰なき人ではない。然し事實に於て信じてゐないものを自分が信じてゐると考へ、そしてそのことを是認して

ゐる人が眞に信仰なき人である。

九

人々の宗教的意識はたへず完成へと努力する。

一、我々は人生の法則に就ての古來の賢者及び聖者の教訓によつて利するところがあらねばならぬ。然し我々はそれらを我々自身の理性によつて、それが理性と一致するものは享受し、理性と矛盾するものは拒否することを吟味しなければならない。

二、若しも神の法則から迷ひ出でないために、人が一度彼によつて採用された信仰を棄てることに逡巡するならば、彼は自分の道を失はない様に自分を柱に結び付けてゐる人と等しい。

三、人々の多数が、現代には最早適應しなくなつた太古の宗教的教示を最も頑固に信じて、新らしい凡ての教訓を表面的並びに有害なるものとして拒斥すると云ふことは不可解である。かやうな人々は若しも神が古代人に眞理を開示したのならば、神はなほ變ることなく同じものであり、そしてそれ以後に生存せる人々にも、今現に生きてゐる人々にも示現することが、可能であると云ふことを忘れてゐるのである。

ト
ロ
ー

四、人生の法則は變へることは出来ない。然し人々はそれを益々はつきりと掴むことは出来る。そして如何にそれを生活に充足すべきかを學ぶことは出来る。

五、宗教は聖者がそれを説いた處の理性にとつて眞なものではない。そうでなくて實は、聖者がそれは眞であると云ふことを理性に對つて説いたものである。

レ
ッ
シ
ン
グ

六、雨水が雨樋とひから落ちるときに、それは恰も其處から來る様に我々には見える。然し雨は實に、天から降るのである。聖者や賢者の教訓に就ても同様である。我々は教訓は彼等から來ると考へるが、然しそれらは神から來るのである。

ラ
マ
・
ク
リ
シ
ナ
から

神

我々の内部と全宇宙との凡ゆる物有的なもの以外に、我々は我々の肉體に生命を與へ、それと結合せる非物有的な何ものかを認識する。この非物有的な、我々の肉體に結合せる何ものかを我々は我々の靈と呼ぶ。何れのものとも結合せざるも、生存せるあらゆるものに生命を與へてゐる、同じ何ものかを、我々は神と呼ぶ。

一

神は人の内部から知られる

一、凡ゆる信仰の基礎は我々の肉體と他の生物の肉體とに我々が見たり感じたり

するものの他に、別に、我々の目に見ゆる、物有的な凡ゆるものに見えざる、非物有的な、しかも、生命を與へてゐる何かしらがあると云ふ事實の中にある。

二、私は私の内に、それなくては、それが無になるだらうところの何かしらのある事を認識する、これが、我々の神と呼ぶところのものである。

アンヂェラス

三、自分が何であるかと云ふ事に就いて、考へてゐる人は各々、自分が全體ではなくて、あるもの、特殊な分離せる部分である事を承認せざるを得ない。そしてこの事を把んで、人は常に彼がそれから分離されてゐるこの何かを、彼が見る物質の世界、その上に彼が棲み彼以前に彼の先祖が棲んだ地球、彼が見る、空や、星や、太陽だと考へる。

併し、若し、人が今少し、この問題に考へを拂ふか、或は、この世界の賢者達がそれに就いて考へた事を發見するならば、彼は、人々がそのものから分離されたも

のと感じる何かは、空間に於ては各方面に、又時間に於ては終りなく擴つてゐる物質の世界でなく、他の何か知らである事を會得するに違ひない。若し人が更に深くこの問題に就いて考へ、そして、それに關する、常に賢者達の信じた事を學ぶならば、彼は初めがなかつた、そして終りもないだらう、そして空間に於て何の制限も持たず、又持ち得ない、物質の世界が、何ら、眞なるものではなくて、只我々の夢に過ぎない事を會得するに違ひない、それ故に、それから我々が分離されてゐると我々自身が感じる何かは、時間と空間とに於て、初めと終りとを持つ何かではなくして非物有的な、精神的な何かである事を會得するに違ひない。彼の起原として人が認めるこの精神的な何かがあらゆる賢人達の常に神と呼んだ、そして尙今も呼んでゐる所のものそれなのである。

四、神を認識する事は自己自身の内部に於てのみ可能である。汝が汝自身の内に神を見出さざる限り、汝は何處にも彼を見出す事は出来ないであらう。自己自身の

内に神を見出し得ざる者に神は存在しない。

五、自分は自分の内に他の各々のものから分たれてゐる精神的な存在を認識する自分は他の各々のものから分れてゐる同じ精神的存在を他の人々の内に認識する。併し若し自他の内にこの精神的存在を知らば必ずそれ自身が存在せざるを得ない。それ自身に於ける、この精神的存在を我々は神と呼ぶ。

六、生きてゐるものは汝ではない。汝が汝自身と呼ぶところのものは死せるものである。汝を活動せしむるものは神である

アンヂェラス

七、仁事によつて、神から報償を得られると考へるな、あらゆる仕事は神の前に於ては無きに等しい。重要な事は、神の前で償報を得やうとする事ではなくて、神であらうとする事である。

アンヂェラス

八、我々が、目で見、耳で聞き、指で觸れなかつたなら、我々は我々の周圍にあるものに就て何者をも知ることは出來ぬ。若し、我々が、我々の内に神を認めなかつたなら、我々は我々自身を知らず、我々の周圍の世界を見たり、聞いたり、觸れたりする、我々自身の内部を知らないだらう。

九、如何にして神の子となるべきかを知らないものは永久に動物の水平面上に殘るであらう。

アンヂェラス

十、自分が世俗の生涯を送るのなら、自分は神なくても出来る、併し、自分が如何なるものであるか、何處から自分が來たのであるか、何時自分は生れたのであるか、死ぬ時、自分は何れに行くのかと云ふ事を考へさへすれば、自分はそれから生じそれにと近づきつゝ、あの何かの存在を許さねばならぬ。自分は、自分が自分の理解する事の出來ない何かからこの世界に來た事と、自分が等しく理解する事の出來

ない何かにと近づきつゝあることを否定することが出來ぬ。それから自分が來、自分がそれに行きつゝある、この理解の出來ぬ何かを自分は神と呼ぶ。

十一、人は、神は愛である、愛は神であると云ふ。彼等はまた、神は理性である、理性は神であるとも云ふ。二つとも、全然眞理ではない。愛と理性とを、我々は我々自身の内に認める。しかし、彼自身の内に於ける彼そのものが如何なるものであるかは我々に知る事の出來ぬ神の特性である。

十二、神を怖れる事は良いことではあるが彼を愛する事は更に良い事である。併し、總ての中で最も良いことは彼を蘇生することである。

アンヂェラス

十三、人は愛しなければならぬ。併し人はその内に惡の存在しないもののみを、眞に愛することが出来るのである。そして、そのものの中に惡の存在しない存在が只一つある。即ち神である。

十四、神が何であるかと云ふ事に關しては、人々によつて相違があるけれども神を信じてゐる人總てが猶且つ、彼等に神が要求するところのものに就ては、常に一致する。

アンヂェラス

十五、神が汝の内ある自分自身を愛せなかつたなら、汝は汝自身、神或は汝の隣人を愛することは決して出来ぬ。

十六、神は孤獨を愛する。彼は汝が神に就いて、彼のみを思ふ時、そこに、彼獨りのある時にのみ汝の胸に入つて行くだらう。

アンヂェラス

十七、アラブにモーゼに就いての一つの話がある。曠野をさまよへるモーゼが、牧羊者の神に祈つてゐるのを聞いた。如何に牧羊者が祈つたか、それは斯うである。「神よ、おう、私が向ふ合つてあなたに會ひ、あなたの下僕となる事が出来ませう」

様に！ どんなに喜んで私はあなたの足を洗ひ、それに接吻し、その上にサンドルをも履せ、あなたの髪を櫛り、あなたの衣物を洗ひ、あなたの住居を手當し、私の羊の乳をあなたに齎らす事で御座いませう。私の胸はあなたに憧れてゐます。」この言葉を用いてゐたモーゼは怒つた、そして云つた。「汝神を罵る者よ！ 神は肉體を持ち給はず。彼には衣物も住居も下僕の扶けも要らない。汝の言葉は惡である。」牧羊者は哀しまされた。彼は肉體を持たない、肉體の要らない神を想像する事が出来ず、彼がしなければならぬ様に神に祈り、神に仕へる事が出来ないので彼は絶望に落ちた。その時、神はモーゼに云つた。「汝は何故に、我が忠實な下僕から去つたのか。各自は自分自身の思想と自分自身の言葉とを持つてゐる。ある人に善い所の者も、他の者には惡である。汝に毒なるものも他の者には甘い蜜であり得る。言葉は何をも意味するものではない。余は余に向へる彼の胸が見える。」

十八、人は種々な方法で神に就いて語る、併し同じ方法で彼を感じ、理解してゐる

る。

十九、人は二本の足で歩かざるを得ない、と云ふ事と同様に神を信せざるを得ない。この信念は他の形に變へても良い、それは共に根絶されるかも知れぬ、しかしこの信念なしに彼自身を理解する事は出来ぬ。

二十、人は自分が空気を呼吸してゐる事を知らないかも知れないけれども、自分が息切れしてゐる時には、それなくしては自分が、生存することの出来ない何かを缺いてゐる事を知る。何のために、自分が苦んでゐるかは知らないかも知れないけれども、神を失へる人に就いても、同じ事は眞である。

二

理性ある人は神を認知する事を約束されてゐる

一、ある人は神に就いて、彼は天に住むと云ふ。又彼は人間の内に住むとも云はれる。兩方の説述は眞である。

彼は天に、即ち、限りなき宇宙にあり、そして彼は又人間の靈の内にもある。

二、人は、彼自身の個人の肉體の内に、精神的な見えざる存在——即ち神の存在を感じながら、そして同じ神を生きてゐる各各の者に見ながら、自分自身に質問する。何故に唯一にして見えざる精神的な存在なる神が、彼自身を、個人的な生物の肉體、私のや彼のものの内に閉ぢ込めたのであるか。渾一なる精神的な存在が、何故、恰もそれ自身に於ける如くに、それ自身を分つたのか、何故、精神的な見えざるものが、別個の、物有的なものとなつたのか、何故不滅なるものが、それ自身、死するものと聯盟したのか。

そしてこの世界に彼を送つた神の意志を満すところの人のみがこれ等の質問に答へることが出来る。

「この凡ゆる事は自分の幸福のために爲されたのである。」かく、人は云ふ事が出来る。「私は彼に感謝し最早や質問も訊ねまい。」と。

三、我々が神と呼ぶものを、我々は、天と各人の内と、この両方に見る。冬の夜に、若し、空を眺め、星又星と、限りないのを見れば、そして、この多くの星が、それに我々が住む我々のこの地球よりも遙かに大きい事、我々の見る星の後に、何百、何千何百萬、の同じ大きさの星やより大きな星さへある事、星と天とに際限のない事を考へれば、汝は我々の握むことの出来ない何かのある事を會得するに違ひない。

併し、若し、我々が自己の内を見、靈と呼ぶ處のものを感ずるなら、我々の自己の内に我々が把握し難い何かを、だが、他の如何なる事よりも更に確實に知つてゐて、それに依つて一切のものを知る何かを見て、我々は我々の靈の内に我々が天に見るものより尙も理解し難い、更に大いなる何かを知る。

我々が天に見、我々自身の靈の内に感じるところのものが、我々の神と呼ぶところのものである。

四、凡ゆる時代に、凡ゆる國民の内に、世界を支持してゐる、ある見えざる力に對する信仰が續いて來た。古代人は、これを、宇宙の理法、自然、生命、永遠と呼んだ。基督教徒はそれを精靈、父、主、道、眞、と呼ぶ。目に見える、變化する、世界はこの力の影の如きものである。

神が永遠なる如くに、目に見える、神の影なる、この世界は永遠である。

しかし、見ゆる世界は單なる影に過ぎない。見えざる力——神——のみが眞に存在する。

スコポロダ

五、それなくては天も地球も存在し得ぬ、存在がある。この存在は、澄める、非物有的な、その特質を、我々が愛と理性と呼ぶ、しかし、それ自身の名を持たない

存在である。それは無限の遠方のものでしかも、限りなく近いものである。

老 子

六、彼がどうして神の存在を認識するかを訊ねた人があつた。彼は、人は太陽を見るのに蠟燭を要するかと答へた。

七、若し、自分自身を偉大なるものと信じる人があるならば、彼が神の高さから物事を見ないと云ふ證據である。

アンヂエラス

八、人は凡ゆる方面に無限である世界を、又は自づと意識的である靈を、考へないかも知れぬ。しかし、若し、少しこの問題に思慮を拂ひさへすれば、人は我々が神と呼ぶところのものを認めざるを得ない。

九、アメリカに、生れ乍らの聾で啞で盲目の少女がある。彼女は觸感によつて讀む事と書く事とを教へられた。彼女の教師が神に就いて彼女に話してゐた時、その

子供は、「それに就いては常に、知つてゐた、しかし、どう、それを呼ぶべきかを知らなかつた。」と云つた。

三

神の意志

一、我々は理性よりはむしろ母親の胸に抱かれる嬰兒の持つ感情によつて、神を知るのである。嬰兒は彼を抱き、彼を育て、彼を温め、彼を養ふ人を知らないが、何人かがその事をしてゐる事を知つてゐる、そして、尙それ以上に、その人の力の中に自分のある事を知つてゐるのみでなく、彼女を愛してゐる。人が神に於けるも正しくその通りである。

二、人が神の意志を満たせば満たす程、人はよりよく神を知るのである。

若し、人が神の意志を満たさないならば彼は、神を知つて、神に祈ると確言するかも知れないが、彼は全く神を知らないのである。

三、一物を知るために、あなたがそれに近づかなければならない如く、丁度その様に、神に近づく事に依つてのみ、あなたは神を知る事が出来る。そして、神に近づく事は善き仕事に依つてのみ出来る事である。

人が自己を善き生活を送る様に習慣付けければ付ける程、いよいよ近く神を知るであらう。そして人は神を知れば知る程、更に良く彼はその仲間を愛するだらう。

一つの事が他の事に導いて行くのである。

四、我々は神を知る事は出来ぬ。我々は神に就いて、この事のみを知り得るのである。即ち、新約全書の中に書れたる神の法則とその意志とである。この法則を知れば、我々は、法則を興へるもの、神それ自身を知り得ないけれども、法則を興へるものが存在してゐると云ふ結論に導かれる。

我々のみが實際に、我々の生活に於て、神の興へた法則を行はなければならぬ事と、我々の生活がこの法則の實行に依つて廣く且つ良くなる事とを知つてゐる。

五、人は、何ものかが彼の生命を造り、自己が何ものかの樂器であると感せずにはゐられない。そして、若し彼が何ものかの樂器であるならば、この樂器を奏してゐる何ものかがなければならぬ。

そしてこの何ものかが神である。

六、どうして、自分が嘗て、その中で我々が生きてゐる、此の世界と生活との背後に、何かしらのある事を見誤つたか、それは驚くべき事である、何故に、この世界が在存し、沸騰せる水面に泡が出来、それが破れ、消える様に、何故、この世界に我々があるのかと云ふ事を知つてゐる何かしらがあるかと云ふ事を見誤つたか。

然り、何か知らがこの世界を造り、何かしらがこの凡ての生ける生物を造り、何かしらが自分を造り、私の生命に作用してゐるのである。尙、この太陽や此等の泉

やこの水はどうしてあるのか。何故に、此等の苦みや出産や死や恩恵や罪があるのか。私に取つて、見た處何の意味もない處の、しかも非常に勇ましくその生命を警戒しながら、最善を盡して、その生活を送つてゐる生物、その心に於て、生んとする情熱が非常に強く築れてゐる生物が何故に存在するのか。

此等の生物の生活は凡てのものが何かの目的のためになくはならぬものである事を、他の如何なるものよりも、更に良く私に信じさせる。そしてその目的は合理的なものであり、良いものであるが私には理解する事の出来ないものである。

七、私の精神的、「自分」は私の肉體に取つては、縁者でない、それ故に、自身の肉體には、それ自身の決意力はないが、何かしら高き意志との結合がある。

この高き意志は我々が神として理解し、神と呼ぶ處のものである。

八、神は崇拜さるべきものでも歎めらるべきものでもない。人は只、神に就いては沈黙を守り、神に仕へる事が出来るばかりである。

アンヂエラス

九、人が他の人の前で、主よ、主よ、と云ひ、叫び、繰り返してゐる限り、それは彼が神を知らない事を示してゐる。神を知れる人は沈黙するのである。

ラマ・クリシナ

十、悪の間には人は神を感じない、人は彼を疑ふ、救ひは常に唯、一つの事の内にのみある——それは確實な事である、即ち神に就いて考へないで、その法則のみを考へ、それを満す事、一切の人を愛する事である。

さすれば疑惑は消え去つて、あなたは再び神を見る事だらう。

四

理性に依つて神を知る事は出来ない

一、自己の内に神を感じる事は可能な事であり、容易な事である。
しかし、神を有るが儘に知る事は不可能な事であり、要なき事である。
二、理性に依つて、神が存在してゐる事と人間の内に靈のある事とを認識する事は不可能の事である。
理性に依つて、神が存在しない事、又は靈が存在しない事を知る事も、等しく不可能の事である。

パスカル

三、何故に自分が一切の他のものから分たれてゐるのであるか、何故に自分がそれから分たれてゐる全體なるものが存在する事を我々が知つてゐるのであるか、何故に我々は、この全體なるものが如何なるものであるかを理解する事が出来ないのか。何故に私の『自己』は常に變化してゐるのか。我々は全く、これを理會する事が出来ない。しかし、我々は全て、この中には意味がなければならぬ事を感じな

い譯には行かない。凡て此等の事がそのものにとつては明白な事であり、何故に凡てのものがかゝる状態にあるかを知れるものがある事を、考へない譯にはゆかない。
四、各人は神を感じる事が出来る、しかし、何人も彼を知る事は出来ぬ。
故に、彼を理解しやうとはしないで、彼の意志を満たさんことを努めよ、汝自身の内に神を、だんだん、生き生きと感じる事を努めよ。
五、我々の理解した處のものなる神は最早神ではない。理解されたる神は我々自身の如く限られてゐる。神を理解する事は出来ぬ。神は理解する事の出来ないものである。

ヴィベカナダ

六、若し太陽が汝の目を盲目にすれば、汝は太陽がないと云ふ事は出来ぬ。
神がないと云ふ事は出来ぬ、汝が、一切のものゝ最初と原因とを理解しやうとする時、汝の理性は失はれ、混亂されるからである。

七、「何故に、汝は私の名を問ふのであるか。」と神がモーゼに云つた。

「嘗てより存在し、現にあり、未來にも存在するだらう、移り動く凡てのものの背後を見れば、汝は余を知るだらう。余の名は余の存在と同じものである。

余は余である。余は有るがまゝの余である。

余の名を知らんとするものは、余を知らないものである。」

八、知らるゝ理性は永遠の理性ではない、名付けらるゝものは最も優れたる存在ではない。

九、私に取つて神とはそれに向つて私が努力する處のものである。それに對する努力から私の生活は出來てゐる。それ故に神は私に取つて決定的に存在するもので

ある、私が彼を理解する事も名付ける事も出來ぬものである。

私が彼を理解したなら、私は彼に到達してゐるだらう、そして私が對象として努力して行く何ものもなくなるだらう、そして生活もなくなつて了ふだらう。

しかし、私は彼を理解する事も出來ず、彼を名付ける事も出來ぬ、しかし又、私は彼を知つてゐる。

そして私の知つてゐる凡ての智識の中、この智識が最も確實なものである。

私は彼を理解しないが、しかも、彼の居ない時私は常に怖れを感じ、彼と共にゐる時にのみ私は怖れを感じないと云ふ事は不思議な事である。

この世に於ては私が彼を知つてゐる以上にもつとよく、もつと近く、彼を知る必要がないと云ふ事は尙、更に不思議な事である。

私は彼に近づく事が出來る、私はそうする事を願ふ、この内に私の生活がある。しかし、彼に近づいても、彼は私に取つて理解されないし、又理解を増す事も出

来ない。

理解するがための私の想像の凡ての試みは（例へば、創造者、大慈悲者、そうした種類の何かしらの如きもの。）只彼から自分を遠避けるものに過ぎないで神に近づく事から私を妨げる。

「彼」と云ふ代名詞さへも彼には幾分小さいものである。

十、神に關して云はれる凡ての事は神に似ないものである。神は言葉に云ひ現す事は出来ぬ。

アンヂエラス

五

神を信じない事

一、道理を辨ふる人は自身の内に彼の魂と宇宙的靈——神との觀念を見出す、そして、この觀念を全く明白なものとする力のない事を知つて、謙遜にその前に踏み止まり、そのペールに觸れないのである。

言葉で神の觀念を説明しやうと求めてゐる心的に精化された博學な人が何時も居たし、尙今も居る、私は此等の人々を裁ふとはしない。只、彼等が神は存在しないと云ふ時彼等はいけないのである。

人々と人々の狡猾の手柄とは一時、或る人に神は存在しないと信じさせるかも知れない、かゝる事の起る事を私は認めるが、かゝる無神論は續くものではない。これか、あれかの方法で、人は常に神を求めらう。神が現在よりも、自身を尙明白に現したにしても、神と反對の人間は神を否定する新しい方法を發明しただらうと自分は信ずる。

理性は常に心の要求するものに屈従する。

二、老子の教に依れば神がないと考へる事は、^{フイガウ} 轡を吹く時、^{カレント} 息が ^{フイガウ} 轡から出て来て、廻りの空氣から來るのではない、そして轡は空氣がなくても吹く事の出來るものと考へるが如きものである。

三、悪しき生活を送れる人々が神がないと云ふ時、彼等は正しい、即ち、神は神の方向を見て、神に近づいて行く、それ等の人々に取つてのみあるのである。

神から抜き、神からそれて歩いてゐるそれ等のものに取つて、神はないし、有り得る事も出來ぬ。

四、二つの種類の人々が神を知る事が出来る。彼等が總明であつても、愚鈍であつても心の貧しき人々である。それと眞に賢き人々とである。

傲慢なる人々と普通の智識ある人々とのみが神を知らないのである。

五、神の名を書く事と、表現することとは出來ぬ、しかし、神を認めない事は不

可能な事である。若し、神がないのなら、何ものも有り得ない。

六、神を求めざるものに取つてのみ神は無きものである。

神を求めたなら、神は彼自身をあなたに現はすだらう。

七、モーゼは神に呼んだ。「私はあなたを何處に見出すのか、主よ。」

神は、「汝は常に私を見てゐるのである。若し、汝が余を求めらなら。」と答へた。

八、あなたが神について信じてゐる如何なる事も眞ではない、神は存在しないものであると云ふ考へがあなたの頭に入つても、混乱してはならない、何故なら、これが凡ての人にとすると起る事である事をあなたは知り得るのだから。

嘗て、信じてゐた神を信じなくなつたのは神がないからであるとのみは考へる勿

れ。嘗て信じてゐた神を信じなくなつたならば、それはあなたの信仰の中にか誤謬があつたからである。

若し野蠻人が木の神を信じなくなつたとしても、それは神が存在しない事を意味

しないで、單に、神は木にて造られたものにあらざる事を示してゐる。

我々は神を理解する事は出来ぬ。しかし我々はますます、神を識る事が出来る。それ故に神の原始的の表現を捨てるなら、それはまことに、我々に取つて良い事である。

それは、神に就いてのより良く、より高き意識を我々に與へる助けとなる。

九、神の存在を證する！ 神の存在を證すると云ふ考へ程馬鹿考へが他にあり得るだらうか。

神の存在を證する事は我々の生きゝゐる事も證する如きものである。

何人に證するののか。

如何なる議論に依つて。

何のために。

神がないならば何ものもない。

どうして我々は神を證明する事が出来るのであるか。

十、神は存在する。我々はそれを證明すべきではない。神の存在を證する事は不敬な事である。その存在を否定する事は狂氣である。神は我々の良心、人類の良心、周囲の全てのものの中に生きてゐる。星の輝ける蒼空の圓家屋の下、我々の愛するものの墓の上、死を宣告された殉教者の光榮ある死の前で、神を否定する事は、——眞に憐れむべき、又は眞に荒める人のみに、出来る事である。

マツチニイ

七

神を愛する事

「神を愛すると云ふ事が意味する事を私は理解する事が出来ぬ。理解し得ぬ、知

らざるあるものを愛する事が出来得るか。

あなたの隣人を愛する事は明白且つ又善なる事であるが、神を愛することは單なる言葉に過ぎない。」

多数の人々はこんな風に考へ且つ語る。

しかし、か様に考へ、語る人は非常に誤つてゐる。彼等はその自分に合はない、要もない隣人を愛する事が如何なる事を意味するか理解しない。彼等は不快な、誓の人々であるが、一切の人は平等のものである。

この方法にて、神を愛する人のみはその隣人を愛する事が出来る。その神は凡ての人々に取つて同じものである。

靈

觸知する事の出来ない、見えざる、非物有的な、生とし生けるものに生命を興ふる、自立する或るものを我々は神と呼ぶ。總ての他のものから肉體に依つて分たれてゐ、そして我々が自己として意識する、同じ觸知する事の出来ない、見えざる非物有的な根元を我々は靈と呼ぶ。

一
靈とは何であるか。

一、老年に達した人は多くの盛衰浮沈を経て來て居る。彼は最初は嬰兒であつた。

それから子供となり大人となり、老人となつたのである。

彼は變つてゐるけれども、併し、常に、自身を「自分」と呼んでゐる。この「自分」は何時も變らず同じである。この「自分」は幼年の時に於いても成年の時に於いても、その老年に於いても同じであつた。此の變らざる「自分」を我々は靈と呼ぶのである。

二、彼が凡ゆる周圍に見るもの、無限の宇宙が全く見る通りのものであると考へるならば、その人は非常に間違つてゐる。人は只見聞、觸知の各自の感官を通じてのみ、總ての物質を知るに過ぎないのである。彼の感官が變つたならば、全世界は違つたものに見えるだらう。故に、我々は知る事は出来ない、あるがまゝに、この物質的な世界を知る事は出来ないのである。

我々が眞に、充分に知るは只一事のみである。即ち我々の靈である。

二

「自分」は精神的なものである。

我々が「自分」と云ふ時には、我々は我々の肉體を指してゐない、だが我々の肉體が、それ故に生きてゐるものを指してゐる。では、この自分とは何であるか。この自分が何であるか我々は言葉にする事は出来ない、しかし、我々は我々が知つてゐる他の何よりもつと良く此を知つてゐる。我々は此の自分がなかつたなら、我々は何者をも知り得ないし、我々に取つて世界には何者なくなり、我々、我々自身も存在しないのだと云ふ事を知つてゐる。

二、この事を考へる時に、自分の靈が何であるかと云ふ事よりも、自分の肉體が何であるかを理解する方が私に取つては更により困難な事である。肉體は何か「他のもの」であると云ふ事が私にびつたりと來ると同じ様に「自分のもの」である

ものは霊である。

三、人が若し彼自身の内の霊を識らないならば、それは彼が霊を持たない事を證しないが只彼は未だ彼自身の内の霊を知る事を學ばないと云ふ丈の事である。

四、我々の内部が何であるかを知らない限り、我々の外部を知る良い方法は我々に取つて何であるか。又、我々自身を知らないで世界を知る事が出来るだらうか。家にあつて盲の人が、外へ出た時に見る事が出来るものであらうか。

スコボロダ

58

五、火なくして蠟燭が燃えないのと丁度同じ事で、精神的な生活なしに人は生きる事は出来ない。精神は凡ゆる人の中にある、しかし凡ての人必ずしも此に氣付かない。此を知つてゐる人の生活は幸福である。しかし此を知らない人の生活は不幸である。

パラモンの古言

三

霊と物質との世界

一、我々は地球、太陽、星、海の深さを測量した、我々は黄金を探して地球の内部に穿ち入つた。我々は河川や月の山岳を調査した、我々は新しい星を發見してその面積を知つてゐる。我々は深淵を埋めて了つた。我々は巧妙な機械を建造した。我々が新しい發明品を得ないで過ぎ去る一日もない。我々の能力に制限があるだらうか。だが併し、何か、一番大切なものが缺けてゐる。我々が我々自身を知らない事が即ちそれである。我々は赤ん坊の如きものである。即ち嬰兒は障害を感じる。が併し、それが何事であるか、何故であるかを知らないのである。

我々は要らぬ事を澤山に知つてゐるが、最も大切な事、即ち我々自身を知らない

59

ために障害があるのである。我々は我々の内部に在るものを知らない。我々が若し、我々の内に在るものを知り、覚えてゐたならば、我々の生活は全く別なものとなるだらう。

スコポロダ

二、この世界の凡ゆる物質物、それに依つて我々は眞の自然を知る事は出来ない。十分に我々に知られるものは我々の内部の精神的なもののみである。即ち、我々が意識する處のもの、我々の感覺と思考とに依らない處のものである。

三、何の方面に於ても世界に境界はなく又有り得ない。一事物とどんなに距離があつてもそれに關らず最も遠い距離の彼方には尙更に距つて他の物がある。時に就いて云ふも亦同じ事である。過ぎ去つた數千年のその前には無数の更に以前の年があつたのである。それ故に、今日、物質の世界が何處で、又、如何であつたか又如何に今後なり行くかを知り得ないのは明らかな事である。されば人は何を理解する

事が出来るか。只一事のみ——それを取つては時間も時間も何れも必要でない——即ち人の靈である。

四、人々は暫々手を以つて觸れ得るもののみが存在すると考へる。けれども全く反對に見得ざる、聞き且つ觸れ得ざるもの、我々が「自分」と呼ぶもの、我々の靈のみが眞に存在するものである。

五、孔子の學徒は云ふ。天地は偉大である。しかし、色と形と大きさとを持つ。しかし、人間の内には、各々の事に就いて考へる事の出来る、色や形や大きさを持たない或るものがある。かくて、若し全世界が死滅したならば、人間の内部にある所のものが、それのみで、世界に生命を與へる事が出来るだらう。

六、鐵は石よりも堅い、石は木材よりも堅い、木材は水よりも堅い、水は空氣よりも堅い。だが、觸れる事、見聞する事が出来ないものは何れのものよりも更に堅い。一つのものが常にあつた。そして今もあつて、決して失はれる事はないだらう。

それは何であるか。

それは人間の内にある靈である。

七、身體に就いて自分が如何なるものであるかを考へる事は人間に取つては良い事である。此の身體は蛋の身體と比較する時には大きい地球と比較すれば些細なものである。

又、我々の地球も太陽に比ぶれば砂の一粒である、太陽も亦狼星シリウスと比較すれば砂の一粒で、狼星も尙他の星と比べる時には何ものでもない。かくして際限のないと云ふ事を考へるのは良い事である。

人かその身體を以て太陽や星と比較するに足りない事は明らかである。

そして、我々は百年、千年、數千年前の時代に就いて考へる事すらしなかつた。しかも尙、我々の様な他の人々が誕生し、成人し、そして死ぬのである、自分の

様な數百萬の人々の肉體は何ものも骨或は骨の塵すらも、残してはゐない、そして自分の後から數百萬の人々が生存するだらう、自分の骨からは草が生えるだらう、羊はその草を食ふだらう、そして人々は羊を食ふだらう、自分の何者も塵の一粒、記憶すらも残らないだらう、事を思ふ！ 私が虚無である事ではないか。

眞に虚無である。しかしこの虚無はそれ自身と宇宙に於けるその地位の觀念を持つてゐる。若しそれが、かゝる觀念を持てるならば、この觀念は虚無とは怖ろしく違つたものである、この全宇宙よりも更に大切な何ものかである。何故なら私の内に、又他の生物の内に私の様にこの觀念がなかつたならば、私の無限の宇宙と呼ぶところのものは存在しないだらう、からである。

四

人に於ける精神的並に物質的根元

一、貴方は何者ですか。

人間です。

如何なる人ですか。

貴方の何處が他の人と違つてゐるのですか。

私はしかしかの親の子供です。私は老人或は青年です、金持か又は貧乏人です。

我々各自は他の總ての人とは異つた特有な一箇のもの、即ち男か女か、成人か小供か少女かである。これ等特有の一箇のものの各々の中に、我々の全體に於て同じものである精神的な存在がある。それ故に、我々の各自が同時に一箇の人、ジョン又はナタリエであり總てに於て同じ精神的存在であるのである。我々が「自分がする」と云ふ時、それはジョン或はナタリエがすると云ふ事を意味してゐる。或は暫々我

々全體に於て同じである精神的なものが何かを欲する事を意味する事があるかも知れない。かくて、ジョンとナタリエとが一事を欲すると云ふ事、そして彼等の内に在る精神的な生きものが全く同じ事を欲しないが全く別な何かを欲すると云ふ事が起るかも知れない。

二、或る者が戸口へやつて來た。私は誰ですかと訊ねた。私ですと云ふのが答だつた。

私つて？ 訪ねて來た私ですと云ふ答、そして百姓の小供が入つて來た。彼は、何人かが、私と云ふ言葉で意味されるものを訊ねるだらうかと驚かされてゐる、そして何故私が何人にもわかり切つてゐるに違いないある事に就いて訊くのだらうかと讀んでゐる。彼の答は精神的な私を指してゐるのだが私、質向は私がそれを通じて世界を指しのぞく、私と云ふ小さい窓を指してゐたのである。

三、我々が我々の自我と呼ぶ處のものは單なる肉體である、わが理性、靈、愛、

此等總てのものは肉體から起るのだと或る人は云ふ。同じ道理で我々の肉體は、單に、肉體がそれに依つて養はれてゐる食物に過ぎないと云つても良い。私の肉體が單に、肉體に依つて同化されて、變化してゐる食物に過ぎないと云ふ事は眞實である、そして、食物がなかつたならば肉體は存じないだらうが、しかし、私の肉體が食物でない事も事實である。

食物は肉體の生活に必須のものであるが食物は肉體ではないのである。

同じ事は靈に就いても眞實である。

肉體がなかつたなら、靈はないだらう、併も私の靈は肉體ではないのである、この事は眞である、肉體は單に靈に取つて必須なものに過ぎないので、肉體が靈ではないのである。肉體が靈のためのものでないのなら、私は私の肉體に就いて何も知らないだらう。

生命の根元は肉體ではなく、靈の内にこそあるのである。

四、、であつた、、になるだらう、、になるかも知れない、と我々が云ふ時には我々は肉體の生活に就いて云つてゐる、しかし、過去にあつたそして未來にもあるだらう肉體の生活の他に、他の別な生活、精神的生活に就いても我々は知つてゐる。

そして精神的な生活は過去にあつた、そして未來にもあるだらう何かでなくて、現に今、ある處の何かである、これこそその生活である。幸福なものは此の精神の生活を送る人である。肉體の生活を送る人ではない。

五、クリストは人の内に、虚榮や恐怖や情熱を以つて此の生活の上に人をあげる何かしらがあつた事を人に教へる。

クリストの教へを受け取つた人は、自分の羽根に氣付かないで暮らして來た、そして突然に、自分に羽根のある事を知り、自由に、何者をも怖れず、自分の飛翔し得る事を體現する鳥の經驗を分け持つ。

良心は靈の聲である。

一、各人の内には二つの生きものが棲んでゐる、一つは盲目で肉體的である、他は知る事が出来て且つ、精神的である。

第二の盲目の生きものは、食ひ、飲み、働き、憩ひて規則的にその任務を遂げる。他の、知る事の出来る、精神的な生きものは、そのみでは何事をも爲さないが、しかし、只、盲目な、動物的な生きものがしてゐるの事を是認したり、不賛成を稱へたりする。人間の知る事の出来る精神的部分を我々は良心と呼ぶ。

この人間の精神的な部分、即ち良心はコンパスの足の様に動く。

コンパスの足はそれを廻す人が足に依つて示されてゐる線をあやまる時にのみ動

く。この事は良心に就いて云ふも同じ事である。即ち、人が正しい事をしてゐる限りそれは沈黙を守つてゐる。

だが彼が正道から踏み迷ふと同時に、良心は彼が何處に、そしてどんな遠くに誤つてゐるかを彼に示すのである。

二、人が悪事をなしたと聞くと、我々は、その人は良心を持つてないと云ふ。では良心とは何であるか。

我々總ての内に棲んでゐるかの精神的なるものの聲である。

三、良心とは總ての人の内にある精神的なものゝ智覺である。そして良心がかゝる智覺である時のみ、それは人間の生活の眞の指導者である。

でなければ人が良心と呼ぶ處のものは精神的なものゝ實現ではなくして、生活する我々が善惡を思慮する處の認識である。

四、情熱の聲が良心の聲よりも高い事があるかも知れない。

だが情熱の聲は良心の静かな聲と遙かに違つてゐる。情熱がどんなに聲高く咆哮しても尙彼等は、静かな温和な撓まぬ良心の聲の前では静かになる。

それは人の内に棲める永遠なるもの、神の聲であるのだから。

五、哲學者、カントは、二つのものが、凡ゆる他のもの、上にあつて、彼の驚異を刺激すると云つた。即ち一つは天上に於ける星であつて、他は人間の靈の内なる善の法則である。

六、純粹の善はあなた自身の自己の内に、あなたの靈の内にある。自分自身を持たないで善を探し求める人は自分自身の箱の内に自分の隠した子羊を、その群の内を探し求めてゐる羊飼の如きものである。

印度の古言

六

靈の神聖

一、人の内に目覺める最初の意識は凡ゆる他の物質的なものから分たれてゐるもの、事、即ちその肉體に就いての意識である。

それから、かく分たれてゐる處のもの、意識即ち靈の意識である、そして最後に、それから生活の精神的な基礎が分割されてゐるもの、意識、全體の——神の意識である。

しかも、全體から、神から分たれてゐる事を意識する何か知らは各人の内に棲める唯一の精神的なものである。

二、分たれたものとして自己を識る事はそれから人が分たれたもの、存在を識る事である、全體、——神の存在を識る事である。

三、眞に、眞に私はあなた方に云ふ。私の言葉を聞き、私を送り遣はしたものを

信ずる人は永遠の生命を得て、審判に至る事はないであらう、しかもその人は死より生命に入れるものである。

眞に眞に、私はあなた方に告げる。死人が神の子の聲を聞くその時は来る、今既にその時が来てゐる、聞く處の人は活きるだらう。

こは父自ら生命を持たれた如くに、子にも自ら生命を持つ事を得させられたからである。

ヨハネ傳五、二十四—二十六

四、大洋に注げる一滴の水は大洋となる。神と結合せる靈は神となる。

アンヂエラス

五、眞理が人に依つて語られる時、それは眞理が人から出でたものである事を意味しない。總ての眞理は神より出づるのである。それは單に人を通して出づるに過ぎぬ。

それがある人の代りに他の人の口を通じたのならば、それは只單にその人が、眞理がその人を通過する事が出来得た程透明に彼自身をする事に成功したからに過ぎない。

パスカル

六、神が云つた。

自分は何人にも知られない寶であつた。自分は知られる事を欲した。そして自分は人間を創つたのであると。

ムハメット

七、神は理性に依つて知る事は出来ない。我々の心を以つて彼を認めるからではなくて只我々が内に彼を識る事からしてのみ我々は彼なるものを知るのである。

眞の人となる爲には人は内に神を識らねばならぬ。

神はあるかと問ふ事は問の様である。

私は存在してゐるか。

それに依つて私が生きてゐるものこそ神である。

八、肉體は靈の食物である。

それは眞の生活の建物の建築に用いられる足場の如きものである。

人が知り得る最大の歡喜は自らの内に自由で、合理的な、深切な、そしてそれ故に幸福なるものゝ存在を、知る喜びである。他の言葉で云ふなら内なる神の意識である。

九、人が彼自身を知らないならば、その人に神を知る事に力を盡す様に勧める事は無駄な事である。この忠言は自らを知つてゐる、かゝる人にのみに與へらるべきである。

神を知る前に人は自らを知らねばならぬ。

十、私が神の坩堝の内に溶けるならば、神は私の上にその姿を刻印するであらう。

アンヂエラス

十一、靈は玻璃である、神は玻璃を射透す光である。

十二、生きてゐるものを自分であると思ふな。生きてゐるものは自分ではない、自分の内に棲める精神的なものである。

自分は只この生きものがそれから、出現する出入口に過ぎないものである。

十三、私とあなたとがあるのみである。我々二人のためにあるのでなかつたなら、この世界の中には何物もなくなるだらう。

アンヂエラス

十四、神に就いて談られてゐる事を信する時私は神を知つてはゐない、だが私が神に就いて私自身の靈の如くに識つてゐる時にこそ私は神を知つてゐる。

十五、神に取つて私は——今一つの彼である。

神は私の内に全く永遠に彼に似て殘されてゐる處のものを發見する。

十六、それは人が常にその背後に聲あるを聞き、しかも、その頭を回らして物語る人を見る力がなかつた様なものである。この聲は凡ゆる國の言葉で談られて、總ての人を導いて行く、だが何人も嘗て、物語る彼を見出した事がない。

若し、人が寸分を違へずしてこの聲に随順して、思考に於てさへも自らをこれと分離しない様に受け入れたならば、人は此の聲と自らとが一つである事を感じるであらう。

そして、人が此の聲を自己自身として考へるなら考へる程、彼の生活はそれ丈良くなるであらう。此の聲は彼に祝福の生活を開展するだらう、何故なら、この聲は人の内なる神の聲であるのだから。

エマーソン

十七、神は總てのものの福利を欲する、それ故に、若しあなたが凡ゆるものの福利を欲するなら、他の言葉で云ふなら、若しあなたが愛するならば神はあなたの内

に生きてゐる。

十八、人よ、人間にて止まるなかれ。神となれよ。かくてのみ、あなたは、あなた自身を、當然あなたがあるべきものとする事が出来るだらう。

アンヂェラス

十九、或る人は、御身の靈を救ひ給へと云ふ、この事のみが滅びるものを救ふ事が出来る。靈は滅びない、此は存在する唯一のものであるのだから。靈は救はれる事を要しないが、汚す處のものからそれを純粹化し、暗くする處のものからそれを照らし出さねばならない、神がいやが上にも自由にそれを通り抜ける事が出来る様に。

二十、或るものは、あなたは神を忘れたのであるかと云ふ。此は良い問である。神を忘れると云ふ事はそれに依つてあなたが生きてゐる、そしてあなたの内に生きてゐる神を忘れる事である。

二十一、私が神を必要とする様に神も亦私を必要とするのである。

アンヂエラス

二十二、あなたが弱くなり、そして甘く事が運ばないならばあなたが一つの靈を持つてゐる事とその内でああなたが生き得る事を思ひ起しなさい。

だが我々はその代りに、我々自身の様な他の人が我々を助けて呉れる事が出来る
と考へるものである。

エマーソン

二十三、あなたが肉體で生きてゐるのでなく靈で生きてゐる事を實際に知り、あなたの内部には世界に於ける何ものよりも更に力のあるものがある事を思ひ起した瞬間に、最も困難な事態からもあなたは逃れ出る事が出来る。

二十四、神と結合せる人は神を怖れる筈がない。神が自らを害しやう筈がない。

二十五、人は何んな時でも自問する事が出来る、即ち

「私は何であるか、

私は何をしてゐるのか、

私は何を考へてゐるのか、

この刹那に何を私は感じてゐるか、」と。

そして彼は直ちに自らに答へる事が出来る。

即ち、「私はあれ或はこれを、現在、なし、考へ、感じてゐる、」と。

だが若し、人が自らに「自分のしたり、考へたり、感じたりしてゐるものを意識する處の自分の内なるものが何であるか」と訊ねたならば彼の唯一の答は自己の意識だと云ふのに違いない。

この自己の意識は我々が靈と呼ぶ處のものである。

二十六、水に棲む魚が嘗て、人が魚は水の中以外では生存する事が出来ないと主張するのを聞いた。魚は非常に驚いた、水とは如何なるものかと、彼等の仲間の中

で訊ね初めた。賢い魚の一匹が「大層賢い老年の魚が海に棲つてゐると云ふ事である、我々して、彼の處へ泳いで行つて、彼に水と云へば如何なものか訊ねやうではないか」と云つた。そして魚は賢い老年の魚の棲んでゐる處へ、海へ泳ぎ出でた、そして彼に「水とは如何なものか」と訊いた。そして賢い老年の魚は水とはその中で我々が棲息し、そしてそれによつて我々が生きてゐるものである。御前達が水を知らない譯はその中で御前達がそれに依つて生きてゐるからであると答へた。正しくその通りで、神が何であるかは知らないでしかも神の中に生きてゐるのだと人々に就いて思れる事は屢々ある。

スーファイ

七

人の生命は肉體にではなく精神にある、肉體と精神とにではなくて

精神のみにある。

一、だが、私を遣はしたものは眞である、そして私は私が彼から聞いたその事を世に告げるのである。

彼等は父を指して云ひ給ひし事をさとらなかつた。

かくてイエスは云つた。汝等、人の子を擧げたる後、私が彼であつた事を知り、私が自分一人で何事をもなさず、只父の自分に教へ給ひし如く此等の事を語つたのを知るであらう。

ヨハネ傳八、二十六―二十八

人の子を擧げるとは我々の内に、我々の内に棲む精神を認め、それを肉體の上に擧げる事である。

二、靈と肉體と、この二つは、彼自身のものと呼ぶ處のもの、絶えざる懸念の種

である。だがあなたは、眞の自己はあなたの肉體ではなくして、その靈である事を知らねばならぬ。この事を記憶なさい、即ち、全肉體の上に靈を擧げて、生活の汚れからそれを保護しなさい。肉體をしてそれを抑壓する事を許すのではない。かくしてあなたは善き生活を導く事が出来るだらう。

マーカス、オウレリアス

三、或る者は人は自己を愛してはならぬと云ふ。自己を愛しないならば生活と云ふものはなくなつて了ふだらう。重要な論點は何を愛するかと云ふ事である。靈か肉體か。

四、時々、苦しむと云ふ事のない、そんなにも強く且つ健康な肉體は一つもない。失はれない金持も一つもない。意志の止まないと云ふ力も一つとしてない。凡ゆる此等のものは不堅固なものである。若し人がその生涯の目的を、強さとか富とか勢力とか云ふものに置くならば、彼が求めた處のものに達し得たとしても尙彼は不安

や怖れや憂悶を持つだらう、その上に彼が生活を築いた、總てのものが彼を去らねばならない事を知り、彼が段々年をとつて死に近附いてゐる事を自ら知るからである。

では、恐怖と不安とを避けるにはどうすれば良いのであるか。

只一つの方法があるのみである。即ち、あなたの生活を、はかなきものゝ上に築かないで、しかし、滅びざる、人の内に生きてゐる精神の上に築くにある。

五、肉體の求める事を行へば、即ち、榮光名譽、富を求めるなら、御身の生活は地獄となるだらう。御身の内なる精神の求める事をなせば、即ち、謙遜、慈悲、愛を求めるなら天國はあなたに要なきものである。天國はあなたの靈の内にあるだらう。

六、隣人に對しての義務と、各自が己自身に、自己の内に棲む精神に負ふてゐる義務とがある。この義務はそれを汚したり、破壊したり、この精神を抑壓したりは

せず、不斷に養ひ育てる。

七、世間の事で、御身は、御身の爲てゐる事をしつゞけて良いか、忍耐すべきであるかがはつきりせず、御身の計畫する事の結果に就いても何等たしかなものはない。しかし、御身の精神のための生活をやるなら、それは違つて来る。若し御身が精神のために生きるなら、御身は正確に、何をなすべきか、即ち靈の要求するところのものを知り、そして、確かに、善が御身の行つてゐる事から起つて来る事を知らう。

八、御身が、情慾、むら氣、怖れ、害心の起るのを感じた瞬間に、御身が何であるかを思ひ起しなさい。即ち御身は肉體ではなくして、精神である事を。

しかも御身を擾亂せしめたものはすぐと静まる事を思ひ起しなさい。

九、總ての我々の困難は、我々が我々の内に棲んでゐるところのものを忘れてゐる事實と、我々が我々の靈を肉體の喜びの一皿の吸物として欺瞞してゐる事實とに

基いてゐるのである。

十、あるがまゝの光を見るためには、御身は御身自身、眞の光とならねばならぬ。

アンヂエラス

八

人間の眞の幸福は精神的幸福である

一、人は精神に依りて生き、肉體には依らない。若し人がこの事を知り、彼の生活を精神に投じて、肉體に投じないならば、御身が彼を鎖につなぎ、鐵の障壁の彼方に禁錮しても尙彼は自由の人であるだらう。

二、各人はその經驗に於て二つの生活を知つてゐる。即ち肉體の生活と精神の生活とである。肉體の生活はそれが絶頂に達するや直ちに弱くなり初める。そして肉

體が分解するまで、ますます弱くなつて行く。反對に、精神の生活は、誕生の日から死の瞬間に至るまで、絶えず、展開し、且つ力を強める。

若し人が肉體の生活を送るなら、その全生活は死を宣告された人の生活である。しかし、若し人がその靈のために生きるならば、その上に彼の幸福の基礎を置いた靈は、その生活の日毎々に力を増し、死も彼には何の怖れるところではない。

三、善き生活に導くためには、御身が何れから來たか又は來たるべき世界に於て何になるだらうかを知るには及ばない。

肉體のそれではなしに、御身の靈の欲する事のみを考へるならば、御身が何處から來たか、死後何になるだらうかと云ふ事は知る用のない事となるだらう。

御身は此等の事を知る必要はない、御身は過去や未來の在存を問ふ事を要しない、完全な幸福の經驗を持つたらうからである。

四、世界が在存するものとなつた時、理性がその母となつた、その生活の基礎が

精神である事を眞に知つた人は彼が危険の外にある事を知つてゐる。

彼がその生活の最後にその唇を閉ぢ、その感官の口を塞ぐ時、彼は何等の懸念をも感じないであらう。

老 子

五、不滅の靈は自身と同じ様な不滅の仕事を要求する。正しくかゝる仕事が靈には托されてゐる。即ち、自己と世界との完全を求める限りなき努力。

總てものが一つの靈を持つ

總ての生活してゐる生きものは互に、その肉體で分たれてゐるが、しかし、彼等に生命を與へるところのものは彼等凡てに取つて、全く同一のものである、

一

靈の神性の自覺は總ての人を結合する。

一、キリストの教義は凡て彼等の内に、全く同一の精神的根元があり、そして彼等が凡て兄弟である事を明す、この事が幸福な共同の生活のために、かく彼等を結合する。

ラメナイイス

二、靈の同じ種類のものが私の内にと同じ様に各人の内にも棲んでゐると云ふのみでは十分でない、各人の内にも私の内にも同じ靈が棲んでゐるのである。

凡ての人間は互に、その個人的肉體に依つて分たれてゐるが彼等は凡て各人に生命を與へる同じ精神的根元を通じて合體してゐる。

三、人々と結ばれる事は大きな幸福である、しかし如何にして一切のものと一つになるか。

自分が親戚のものと結ばれる事を考へたなら、残りの人々はどうなるのか。一切の友達と全露西亞人と、一切の同宗信者と結ばれる事を思つたなら。知らない人々、他の國家や宗教の人々はどうすれば良いのであるか。非常に澤山の人々が居、彼等は非常に違つてゐるのである、どう自分はなすべきであるか。只一つの良藥がある。人々に就いて忘れ、彼等と如何にして一つに結ばれるかと思ひ煩らはず、だゞ、我

々と一切の人々とに棲む一箇の精神的實在と一つにならうと努める事である。

四、自分は數千哩もはなれて、自分の様な同じ生活を送つてゐる、數限りないこれらの者達、永遠に自分が知らないで了ふ人々、自分に就いて何事も知らない人々に就いて思ふ時、自分自身に、我知らず問ねる。

我々の間には、我々を結ぶ絆は、實際ないのだらうか、我々は互に知る事なく死んで了ふのであるか、これは有り得ない事である。實際、これは有り得ない事である。

それは不思議に思はれるかも知れないが、世界の、生きてゐる又死せる一切の人々と自分自身との間に絆のある事が自分には感じられ、又知られる。

その絆が何であるか、自分は理會する事も説明する事も出来ない、しかし、自分はそれが、存在してゐる事を知つてゐる。

五、或る人が、各自の中には、非常に善良な人間らしいものが澤山にあるが亦非

常に悪い、悪意的なものも澤山にあつて、その心的傾向に依つて、今此が現れてゐると思ふと、もう他のものが現はれてゐると私に談じたのを記憶してゐる。全く此は正しい。

苦しんでゐるのを見れば、他の人の中に於てのみならず、時には同一人にも、全く反對の感情を喚び起す、即ち、時には憐憫、時には別な悪意のある喜びの平均を受け、受ける喜びに屈する何かしら。自分は自分自身の内に、自分が時には純粹な憐憫を以つて、時には實に全く別な、そして時折は憎悪や、悪意さへを以つて、一切の生物にふれて來た事に氣付いてゐる。

此は明らかに、我々の内に二つの異つた全く反對の自意識の方法がある事を示してゐる。一つは、我々が我々の箇的存在に就いて意識してゐる時、一切の他の生物が、全く他人と思はれる時、彼等一切が、何か別なもので自分でない時に於てである。その時、我々は我等に對して、相違か、羨望か、憎悪か悪意の他、何も感じな

い。そして、今一つの意義の方法は——彼等と一つのものであると云ふ意識である。この意識の方法に依れば一切の生物は我々に、我々自身の、自分と同じものに思はれ、それ故に、その姿は、我々の愛を引き出す。意識の第一の方法は越えられない壁の様に我々を分離するが、後者は中仕切を取りのぞいて、我々を他のものの中に溶かす。

第一の方法は我々に、一切の他の生物が自分以外の何か他のものである事を認める事を教へる、だが、後者は我々に一切の生物は自分が、自己自身の内に認める、同じ自分である事を教へる。

シヨウベンハウエル

六、人が靈の生活をすればする程、彼は一切の生物と彼の一つなる事をより良く知るに至る。肉體の生活を送ればあなたは異國人の中に一人あるのである、靈の生活を送るなら、全世界はあなたの同胞である。

七、河は沼に似ず、沼は樽に似ず、樽はコップ一杯の水には似ない。しかし、河にも、沼にも樽にもコップにも同じ水が見出される。

同様に一切の人々は變つてゐるが、彼等の内に棲む精神は全く同一のものである。

八、各々の人の内に自分自身を見出す時にのみ人は人生の意義を理解する。

九、何人かと談話を交へ、その目に見入るなら、あなたは彼とあなたが同族である事を感じ、以前に、何處かでああなたが彼と知つたのだと想ふでせう。そう思ふのは何故であるか。何となれば、それに依つて、あなたが生きてゐるそのものが、あなたに於ても彼に於ても同一であるからである。

十、各々の人の内には、世界に於て、それ以上の高いものがない精神が棲んでゐる、それ故に、人は、何であつても少しもかまはない。政治家であつても、罪人であつても、高僧であつても、貧民であつても、彼等は皆平等である、此等の各々の内には、世界に於ける一切の他のものより上にあるところのものが棲んでゐるからである。

貧者よりも貴族を高く評價し、尊敬する事は一つは白紙で包まれ他は黒い紙に包まれてゐるから、後者よりも更に、前者の金貨を高く評價し、尊敬すると同じ事である。常に、自身の内に於ける様に、他の内にも同じ精神が棲んでゐる事を記憶するならば、それ故に一切の人は同様に取あつかはれなければならない、注意深く、丁寧に。

十一、クリストの教義に於ける根本的なものは、彼が、一切の人々は兄弟であるとした事である。

各々の人を彼は兄弟と見た、それ故に、彼は、その人が、如何なる身分職業のものであつても、それには關しないで、各々の人を愛した。彼は内部を見て、外部を見なかつた。彼は肉體を見なかつた。しかし、富めるもの、衣服を通じて、又、乞食の褸衣を通じて、亡びざる靈を見たのである。

最も腐爛せる人々にも彼は、彼自身の如く偉大で神聖な、最も偉大な聖者に、こ

の墮落せる人をかへ得る何ものかを見たのである。

チャンニング

十二、小供は大人よりも賢い。小供は人々の社會的事情に就いて何の區別も出来ないが、その全心靈を以つて、各人の内に、何か彼に於ても、一切の他の人々に於ても同一であるものが棲んでゐる事を感じてゐる。

十三、若し、人が、彼と残りの一切の世界の人々を結ぶ同じ精神を、一々の隣人の内に見ないならば彼は夢の内に於けるが如くに暮らしてゐるのである。

その隣人の内に、神と自分自身とを見る人のみ genuinely、目を醒まして生きてゐるのである。

二

同一なる精神的根元は一切の人々の内に於けるのみならず一切の生

活せる生物の内に生きてゐる。

一、我々は、それに依つて我々が生活し、我々が眞の自分と呼ぶところのものが、名々の人に於て同一なるばかりでなく、犬や、馬や、鼠や、鶏や、雀や、蜜蜂や、尚、植物に於てさへも亦同一である事を我々の胸に感じる。

二、鳥も、馬も、犬も、猿も、全く我々と違つたものであると我々が云ふならば、同じ理由で、一別の野蠻人、黄色人や黒人は、我々と違つたものと云ひ得る。

そして、我々が彼等を違つたものと考へるならば、黒人及黄色人は、同じ理由で、違つた民と考へ得る。では、何人が、我々の隣人であるのか。

これに對しては只一つ答があるのみである。何人が、あなたの隣人であるかは問はないで、各々の生物に、あなたが、爲されるべく欲する處の事を爲せである。

三、生ける一切のものは、苦痛を忌み、生ける一切のものは死を憎む、人に於け

るばかりでなく、各々の生けるもの、内に汝自身を認めよ、殺す事なかれ、苦と死とを惹き起す事なかれ。

生ける一切のものは、汝の如く同じ事を欲つしてゐる、一々の生ける生物の内に汝自身を認めよ。

佛徒の古言

四、人は彼等を苦める事が出来る故にではなく、しかし、彼等に憐憫を抱く能力を持つ故に動物より高いものである。そして人は、また彼の内に棲める同一なるものが彼等の内に棲める事を感じるが故に動物に憐憫を抱く。

五、生けるものへの憐憫は、徳に進まんと欲する何人に取つても、最も至要なるものである。

憐憫ある人は傷付けたり、攻撃したりなどしないだらう。そして彼は自由に許すだらう。善良な人が憐憫を缺く筈はない。

そして、不正な、賤しい人なら、かゝる人は確かに憐憫を缺いてゐるだらう。生ける一切のものへの憐憫なくして、徳は出来ない。

シヨウベンハウエル

六、一切の人々に取つて、自然である生ける生物への憐憫を漸次になくすると云ふ事は可能である。

それは狩獵に於て時に注意さるべきである。別に尙、親切な人々が獵に慣れて、彼等自身の残酷を認めないで動物を苦めたり、殺したりする事を學ぶ。

七、「殺すべからず」——これは獨り、人間のみを意味するのではなくて、生けるものの一切を意味してゐるのである。

この戒律は律令の平板に刻られる以前から人間の胸に刻まれてあつた。

八、人々は動物を食ふ事は正しい事だと考へる、何故なら彼等は神がその事を許してゐると考へる様にされてゐるから。

この事は眞理ではない。

動物を殺し、彼等を食ふ事は罪ではないと何の書物に書いてあるかも知れないが、問題ではない、如何なる書物よりも人間の胸の中には、動物は憐むべきもので人間と同様に殺すべきではないと書かれてゐる。一切の我々は、我々の良心の口を塞がないかぎりこの事を知つてゐる。

九、動物を食ふ一切の人々のみが、自身で動物を殺さなければならなかつたなら人類の大部分は肉を食ふ事を廢めるだらう。

十、その肉を食するため、人間を殺す人が嘗て有つた、そして尙今もゐる事は我々には不思議である。

殺さないでも地上の果實で健康に十分に、樂くその飢を満す事が出来たけれども、それを食ふために、日に何百萬と動物を殺す習慣を、祖父が持つてゐたと孫の不思議がる時が来るだらう。

十一、人間にさへも同情の習慣を、少しづつ無くする事は可能である、そして又自分自身をして昆虫までも同情する様に習慣付ける事も可能な事である。同情が人の胸を満せば満す程それ丈彼の靈のために良い。

十二、我々一切のものは生々と、我々一切の人間の内に、何か、同一のものゝある事を意識する。しかし、動物の内にも亦同じものがある事を我々は殆んど知らずにゐる。しかも、我々がこれらの小さな生物の生活にでも、少し注意を與へるなら、我々は彼等の内にも亦同じ根元のある事を認めざるを得なくなる。

十三、「だが、きつと、蠅や蚊を我々は殺す」「知らずして各瞬間に、我々が日常生活に於て認める事も出来ない生物を殺してゐる。」これは普通に動物に對する人間の冷酷の辯明を見出さうとする人に依つて云はれる事である。かやうに云ふそれらの人は、人間が完全に達し得ない事を忘れてゐる、動物への同情にしてもそうである。

我々は他の生物を破滅せしめないで、生き得る事が出来ぬ、しかし我々は多少同情的であり得る。我々が動物に同情的である丈、それはそれ丈我々自身の靈に良い事である。

三

人が善い生活を送るとそれ丈その人ははつきりと彼の内にある神聖な根元が一つのものである事を知る。

一、人々は、彼等一切のものが互に分離されてゐる様に思ふ。しかも、若し、各人がその生活を他のものから、離れてのみ送るならば人間の生活を持續する事は出来ないだらう。人間の生活は一切の人々の内に棲めるものが神の同一の精神であり又彼等がその事を知るが故にのみ可能な事である。

二、他のものは、彼等のみが、真に生きてゐるのだ、彼等のみが各々のものであるのだ。一切の他のものは無きに等しいものであると考へる。しかし又、道理を辨へた善良な、他のものゝ生活、動物の生活さへも、彼等自身と同様に、本來大切なものであると知つてゐる人々もある。かゝる人々は、只、彼等自身のためにのみ生活してゐるのみではない、又、他の實在、人間や動物に於ても生きてゐるのである。かゝる人々に取つては、生きる事も死ぬる事も容易な事である。彼等が死ぬる時にはそれに依つて彼自身が生活したものが亡びるのみである。それに依つて、他の内に生活したものは残つてゐる。けれども、彼等自身に於てのみ生きたものは狭い生涯と哀しい死とを持つ、死なんとする時にかゝる人々は、それに依つて生きて來た一切のものが消えて行きつゝある事を考へるからである。

シヨウペンハウエル

三、各人の心にも御身自身の内に於けると同様に同じ精神が棲んでゐる、この事

を記憶せよ。

この理由のために、御身自身のみならず、各人の靈も亦神聖なるものとして尊ばれねばならぬのである。

四、一切の愛の仕事の後、何故に我々は我々の靈に幸福を感じるのか。

何故なら、一切の愛の仕事は、我々に、我々の眞の自己が、我々自身の人格の内のみならず一切の生けるものゝ内にも、又存してゐる事を證明するからである。

若し、あなたが、あなた自身のためにのみ生きるならば、あなたは只あなたの眞の自己の瞬時の微片を生きるに過ぎないであらう。しかし、若し、あなたが他のものゝ爲に生きるならば、あなたの『自分』が曠大しつゝある事を感じるのである。

自己のためにのみ、若し生きるならば、あなたは自分が敵の中にある事を感じるだらう、他のものゝ幸福があなた自身の幸福を妨げる氣がするだらう。

若し、あなたが他のものゝために生きるならば、あなたは、友達の中に自分がゐ

る事を感じ、そして、他の各人の幸福があなた自身の幸福となるだらう。

シヨウベンハウエル

五、他に仕へる事の内にのみ人はその幸福を発見する。そして、他に仕へる事に依つて他の内に棲む神の精神に彼が結合するが故に、彼は他に仕へる事の内に幸福を見出すのである。

六、それに依つて、我々が生きてゐる神聖なる精神と云ふものは、只、我々が我々の隣人を愛するならば十分、理會出来るものである。

七、一切の眞に善き仕事は、その仕事に於て、人が自分自身を忘れ且つ、他の人の必要なるものゝみを考へる、驚くべく又理會し難いものであるだらう、若し、それが我々に、非常に自然で習慣的なものでないならば。

實際、何故に人は何ものかを自分が奪ひ取り、世界には實に多くの人々があるのに、自分の知らない他の人間のために、困らされたり、戦つたりしなければならな

いのであるか。

この方法でのみこの事は説明する事が出来る。即ち、他を、益させる人が自分自身から分離されたものではなくして別な形のに過ぎないところの、それに依つて彼が生きてゐる同じものである事を知る事である。

シヨウベンハウエル

八、我々は一切を何れも五感を通じて知つたり、會得したりする。即ち、我々は見、聞き、ものに觸れ、つまり、生きてゐる他の生物の内に我々自身を變入するのである。若し我々が我々の五感を通じてのみ物を會得しなければならなかつたなら、世界は我々に取つて理會し難いものであらう。

我々が世界に就て知つてゐる事は、愛を通じて、我々が他の生物の内に入り、彼の生活を送る事が出来る故に知つてゐるのである。

人々は肉體に依つて分たれてゐる、そして互に理會する事が出来ない。しかし愛

彼等一切を結合する。そしてその中に大いなる幸福がある。

九、若しあなたが精神の生活を送るならば人々の内に於ける一切の不和はあなたに精神的の苦痛を惹起するであらう。

この事は何故に苦痛であるのか。肉體的苦痛が肉體の生命を威嚇する危険を指摘する様にそれと丁度同じ様に、精神的苦痛も人間の精神的生命を威嚇する危険を指摘するのである。

十、一印座哲學者は云ふ、『あなたの内にも私の内にも、一切の生物の内にも同様に、生命の同一精神が棲んでゐる、しかも、あなたは私に怒つてゐる、あなたは私を愛する事をしない。あなたと私とが一つのものである事を思ひ起しなさい。あなたが、何であつても、私とあなたとは一つのものである。』

十一、人がどんなに、悪、不正、愚鈍、或は嫌はしきものであつても、彼を尊敬する事をあなたがよす事は、只彼とのみの關係を破るのみでなく、また、全精神界

との關係をも破る事である。

十二、一切の人々と平和に暮すためには、彼等とあなたとを分つてゐるものではなく、あなたと結合してゐる共通のものに就いて思へ。

十三、人々の外部的、尊敬の對稱を無禮に取り扱ふ事は大きな又許し難い罪だと考へられてゐる。しかし、人間を無禮に扱ふ事は罪と考へられない。しかも、墮落せる人の内には、人間によつて造られたものに過ぎない、外的な、尊敬の對象より遙かに優れた何ものかが棲んでゐる。

十四、人ではなく、病氣、大火、氾濫、又は地震に引き起された哀みに堪える事は容易である。しかし、人々、その兄弟の行爲のために苦しむ事は非常な苦痛である。我々は、人々が我々を愛すべき事を知つてゐる、しかし、その事の代りに彼等は我々を苦める。

『一切の人々は私と同じである。何故彼は私を苦めるのか』と我々は考へる。

この理由のために、人間の不親切に由来する事よりも、病氣や、大火や、早魃からの哀みに堪える方が容易なのである。

四

一切の人類の靈が一つものである事を體得することの効果。

一、我々が精神的兄弟であることを我々は體得してゐるか。我々は一切の人々の靈の内に、我々自身のもの、内に於けると同様に同じ神聖なる根元が存在することを體得してゐるか。否、未だ我々はそれを體得してゐないのである。しかも、これが、我々に眞の自由と幸福とを與へる事の出来る唯一のものなのである。人々は彼等が一つのものであることを體得しない限り、自由且つ幸福にはなれないのである。しかも若し、人々が人間の内の精神的な根元が一つのものであると云ふ基督教の根本

眞理を認めるならば、人間の全生涯は變つたものとなり、人々の間には、今、我々が想像する事すらも出来ない様な縁が打ち立てられるだらう。

我々が我々の仲間に加へる侮辱、虐待、迫害は、今日大いなる罪を行ふよりも更に我々の憤激を起すだらう。然り、我々は今、天國と地獄とのそれでなしに、我々の内に棲む精神の、新しい啓示を必要とするのである。

チャンニング

二、苦し人が他人よりも、官職、名譽、富に依つて自分を顯はそうと求めるなら、如何に彼自身を偉大にしても、満足出来ないだらう、又決つして清明、幸福にもなれないだらう。しかし、若し、彼が他の一切の人々に於けるが如く、同じ神聖な根元が彼自身の内に棲む事を體得したなら、彼は直ちに、彼が如何なる状態にあつても、平和と幸福とに達するだらう。何故なら、彼は彼の内に、世界に於ける他の何ものよりも更に高い何ものかのあることを體得するだらうからである。

三、人々が長生きすればする程一層良く、彼等は、一切のものにある、精神が彼等のものと同一つである事を認めてのみ、その生活が、幸福でよろこばしいものである事を體得する。

四、愛は愛を呼び起す。愛はそう規定されてゐるのである。あなたの内に目覺めた神は、他の人の内にも亦彼自身を目覺すのであるのだから。

五、何んなに、彼があなたに不愉快に、或は無愛想に思はれてもそれに關せず、他の人に會つた時には、彼を通じて、彼、あなた自身とそして全世界に棲む精神的根元と精神の交りを持つ機會であることを、そしてそれ故にこの交りに重荷を感じてはならぬ、だが恵みとしてそれを感謝しなければならぬ事を思ひ起すと良い。

六、幹から切り取られた枝は、そのために樹から分離されてゐる。同様に他の人と争ふ人は彼自身を全人類から分離する。

しかし、枝は他の者の手で切り取られるのであるが、人は彼自身をその隣人から、

自分自身の憎悪を通じて切り取るのである。そしてその爲に全人類から自分自身を切り離なしてゐる事を知らない。

マウカス・アウレリウス

七、そのために、罪を犯した人のみが罰せられてすむ悪い行爲はない。我々の内の悪が他の人々に入り込まない程我々自身を隠す事は出來得ない。善にしる悪にして、我々の行爲は我々の子供の如きものである。彼等は最早我々の意志と相和して生き且つ行爲しない、だが彼等自身に生き且つ行爲する。

ジヨウヂ・エリオット

八、人間の生活は彼等の内に棲む同じ靈が亦一切の人々の内にも生きてゐる事を知らないばかりにむづかしいのである。この事が彼等自身の中に人々への敵意を募らせ、この事が、あるものは金持ち、あるものは貧者、あるものは主人、あるものは勞働者と考へさせる。この事が羨望、悪意を説明し、この事が一切の人類の苦み

を説明する。

九、人間の肉體はそれ自身の善い事のみを求めてゐる。そして人はこの瞞着に従つてゐる。その肉體のみのために人が生きるや彼は直ちに、人と神とに和合せず、彼の求めてゐる善に達つする事に失敗する。

愛

その肉體に依つて神から、又他の生けるものから分たれてゐる人の靈は、それが分たれてゐるものと結合せんと努力する。靈魂は内なる神の絶えざる生長の意識を通じて神と、又愛の絶えざる生長の表現とを通じて他の生きもの、靈魂と結合する。

一
愛は神と他の生けるものとに人を結ぶ。

一、イエスは法律家に云つた。「汝等、心を盡し、魂を盡し思ひを盡して主なる汝の神を愛すべし。これは第一のそして最大の掟である。」と。

そして第二のものは次の如くである。即ち、『汝等、汝自身の如く汝の隣人を愛すべし』かく法律家がイエスに云つた。イエスは、『汝は正しく答へた、この事（即ち、神と隣人とを愛すべしを指す。）をなさば汝等は永遠に生くるだらう。』と云つた。

二、汝等、世の人々よ、汝等は災ひなるかな、汝等の頭上と足下、左と右には悲しみと煩ひとがあるのだ、そして汝等は汝等自身にも不可解のものであるのだ。かゝる不可解は汝が小兒の如く幸福に、且つ愛らしくならない限り汝等に殘されるだらう。かくしてのみ汝等は余を知るであらう、余を知るならば汝等は汝等自身を知り、またかくしてのみ汝等は汝等自身を統べ得るだらう。

佛徒の古言

三、完全なるものゝみが愛される。故に、何れを完全とするか（不完全な）或は又神である完全なるものを愛するために、何れが不完全であるかと云ふ事が質され

る。

若し、我々が不完全なる完全を重んじるなら、早晚、誤りは現れそして愛は止むだらう。だが神の愛は、完全なるものゝ愛は止む筈がない。

四、神は愛である。愛の内に棲む人は神の内に棲んでゐる、そして神は彼の内に棲んでゐる。未だ、神を見た人はない、だが若し、我々が互に我々の内に棲む神を愛するなら、神の愛は我々の内に於て滿されてゐるのである。

若し人が自分は神を愛してゐる、だが兄弟を憎むと云ふなら、その人は虚言者である。自分に見える兄弟を愛しない人が、どうして、自分に見えない處の神を愛する事が出来得やう。愛するものよ、互に相愛しやうではないか、愛は神のものであるのだから、愛する各自は神の子で、神を知つてゐる、神は愛であるのだから。

ヨハネ傳一の四による

五、人々は神に於てのみ眞に結合することが出来る。結合するために人々は互に

歩みよる要はない、だが一切のものは神の許に到らねばならぬ。

中央の上部からのみ光の差し入る廣大な寺院があつたなら、その時、一切の人々がその寺院の内に於て相見るとためには、その中央の光の方に行かなければならぬだらう。世の中に於ても同じである。一切の人々を神の方に歩ましたならば明らかに彼等は皆共に相會するだらう。

六、愛するものよ、互に愛しやうではないか、愛は神のものである、そして愛する人は神の子である、そして神を知つてゐる。

愛しないものは神を知らない、神は愛であるのだからと使者ヨハネが云つた。

一切の人々を愛することは困難な事に思はれる。しかし一切の事はそれを如何にしてなすかを知るまでが困難なのである。人はいろ／＼な事を知ることが出来る。縫ふ事、織る事、土地を耕すこと、刈る事、鐵を鍛へる事、讀む事と書く事と、同様に彼等は如何にして、一切の人々を愛するかを學ばなければならぬ。

この事を行ふを學ぶ事は困難ではない、何故なら、互に愛する事は我々の胸に刻まれてあつたのだから。

『未だ神を見た人はゐない、しかし、若し我々が互に愛するなら神は我々の内に棲んでゐる。』そして、若し、神が愛であり我々の内に棲むならば愛する事を學ぶ事は困難な事ではない。

我々は愛を妨げるものから自身を救ひ出すと同様に、愛の外部的表現を邪魔するものから自身を救ひ出す様に努めなければならぬ。そして、それをあなたが始めるなら、あなたは直ちに一切の科學の中で最も大切なそして必要なもの、如何にして人々を愛すべきかを知るだらう。

七、人々が自分等を愛して呉れる事を知る以上のよろこびはない。しかし不思議にも人々が我々を愛して呉れる様にと、我々が彼等をよろこばせる要はないのである、只、神に身を近づける事を努めれば良い。神に身を近づけるなら、人々を意に

せすとも、人々はあなたを愛するだらう。

八、神に御身等を結合せさせ給へと乞ふ勿れ。神は御身等一切ものに同一の精神を置き給ふて、既に御身等を一つのものとなし給ふた。只、御身等を区分してゐる處のもののみを投げ捨てたならば御身等は一つのものとなるだらう。

九、人は自身のいき事のみを欲するものだと思はれる、しかし、それは、只、そう思はれるに過ぎないのである。

彼の善を欲するものは内に棲める神なのである。そして神は一切の人々の善を欲するのである。

十、神は愛する、しかし、隣人は愛しないと云ふ人は人々を欺いてゐる。

そして隣人は愛する、だが神は愛しないと云ふ人は自分自身を欺いてゐる。

十一、我々は神を怖れねばならぬと云はれてゐる。これは真でない。我々は神を愛し、怖れてはならぬ。あなたが怖れるものをあなたは愛する事は出来ぬ。

そして、尙、あなたは神を怖れる事は出来ぬ、何故なら、神は愛であるから。如何にすれば我々は愛を怖れる事が出来るか。神を怖れず、あなた自身の内の神を意識せよ。そして若し、あなたが内なる神を意識するなら、世界の中にあなたの怖れるものは何もないだらう。

十二、最後の日は審判の日となり、善の神は怒りの神となるだらうと或る人々が云ふ。祝福の神からは、しかも、善なるもの、他は何ものも来る事は出来ぬ。

如何なる信仰があつても、只一つ眞の信仰がある。即ち神は愛である事である。そして愛からは善以外に何ものも来る事は出来ぬ。

現世も來世も、何れをも怖れるな、善以外に何ものも有り得ず、又有り得ないだらう。

ペルシヤの古言

十三、神の如き生活をする事は神の如くなる事である。神の如くになれば、あ

なには何ものをも怖れず、自身のために何ものをも欲する要がない。何ものを怖れず、自身のために、何ものをも欲しなくなるためには、愛のみが必要なものである。内部を見るなら汝は平和を得べしとある人々が云ふ。これは真理の全體ではない。自己から出でよ、自己を忘れる事を努めよ、よろこびの内に幸福を求めよ、と他のものは云ふ。亦、これも真理でない。

よろこびが病氣を除くだらうと云ふ理由のためのみならばこれは真理でない。

平和と幸福とは我々の内にも外にも何れになく、だが神の内にある。そして神は我々の内にも、外にもあるのである。

神を愛するならあなたはあなたの求むる處のものを神の内に見出すだらう。

二

人の肉體が食物を要求して、それを得ない時苦しむと全く同様に、

人の靈魂は愛を求めてそれを得ない時に苦しむこと。

一、一切のものは地球及相互の者々に引かれてゐる、同様に一切の靈魂は神と相互の者々に引かれてゐる。人々が各自、自分のためにでなく、一切のものが一つとして生きるためには、全部のためにのみ必要である。そして、別々な各自のためには要らない神が彼等に示されねばならぬ。

そして人々が一切のものに又一切のものゝために必要である處のものを知るためには、人はその靈魂に入つて、その靈魂の内に愛として自分自身を表現せねばならぬ。

三、人々の勞苦は貧しい收穫、大火、惡を爲す者、からでなく、彼等の生在、互に離れて暮してゐる事から起るのである。そして、彼等は彼等の内に棲む、彼等を互に引く愛の聲に信仰を持たないために離れて暮してゐるのである。

四、人が動物的生活を送つてゐる限り、若し人が他の人々から分離されてゐるのなら、それはそうに違ひなく、他の事がある筈がないと思はれる。しかし彼が精神的生活を始めるや否や彼は他の人々から離れてゐることを不思議な、なげかはしきとして痛ましきこと、思ふ様になり、彼等と一つにならんと努めるだらう。そして、人々を一つにする處のものは愛のみなのである。

五、一々の人は彼を人々から分離させるものよりもむしろ彼を人々に結合させるものをしなければならぬ事を知つてゐる。彼は何ものかがその様に彼に命じた故にではなく人々と結合すればする程その生活が良くなり、反對に、彼が人々から分離すればする程その生活が悪くなるためにこれを知つてゐるのである。

六、どの人間の生活も、一年毎に、一月毎に、一日毎によくする筈のものである。人々が良くなればなる程、一層密に他のものと一つになる。そして彼等が密に結合すればする程、彼等の生活は良くなつて来る。

七、一人の人を愛すれば愛する程、自分はその人との分離を感じなくなる。あだかも、その事たる、彼が私と同じものであり、私が彼と同じものであるかに思れるのである。

八、若し、我々が確實にこの法則、即ち、我々の一致する事に於いて人々と一つとなり、人々の一致しない事にその加盟を求めない事を嚴守するならば、我々は、他宗教徒から、自身を離して、自分達の眞理の見解の同意を求める、所謂、基督徒よりも、遙かに基督に近づくであらう。

九、汝の敵を愛せよ、すれば汝には敵はなくなつて了ふだらう。

十、和合に到る道は、水溜にかけられた板の様に見える。あなたがその道から迷ひ出でた瞬間にあなたは自身を、世間的な虚榮、喧嘩、悪の沼の中に見出す。

愛は一切のものを抱擁する時、しかる時にのみ純粹である。

一、神は我々の幸福なる事を願つてゐる、そのために神は我々に幸福への願求を與へた、しかし神は我々の總體が幸福なる事を願つてゐるので個人としての幸福ではない。そのために神は我々に愛の願求を與へてゐる。このために人々は彼等全體が互に愛する時に於てのみ幸福なものとなるだらう。

二、羅馬の哲學者セネカが云つた、生ける一切のもの、我々の周圍に見られる一切のものは一體である、我々の手や足や胃や骨も、我々は一體なるもの、全員なのであると。

我々は全部が同じ様に産れたのだ、我々全部は同じ様に我々の善を探すのだ、我々全部は互に害し合ふ事よりも相互に助け合ふ事がむしろ良い事である事を理會する。相互の同じ愛は我々の胸にきざまれてゐた。自分は一つアーチの内に一緒に組

まれた石の如きもので、互に支へ合はなければ崩潰する様になつてゐる。

三、各自は出来る丈自身に善い事をなそうと努力する、そして世の中で一番良い事は一切の人々を愛し、それと調和する事である。我々がある人々を愛し、ある人々を愛しない事を感じるなら、どうして、我々はこの賜物に達つし得るか。我等は我等の愛しないものを愛する事を學ばなければならない。人は最も困難な仕事も學ぶ、彼は讀む事と書く事とを學び、科學と手藝とを獲得する。若し人が種々の手藝や科學を學ぶ如くに愛を獲得する事に致々と自己に専心するなら、その人は直ちに、一切の人、彼に氣に入らない人さへも愛する様に自身を訓練する事が出来るだらう。

四、若し、愛が人生に於て最も大切なものである事を體得したなら、人に會つて、何の點でその人が自分に益があり、また如何に何の點で自分がその人に益あるものであるなどと争ふ事はなくなるだらう。この法則に従へばあなたは、自分自身の事のみを心配するよりも常に、一層良くやつて行けるだらう。

五、我々を魅するもの、我々を稱讃するもの、我々に善をなすものを愛するならば、それでは我々自身のために、自身をよくするために、愛するのである。純粹の愛は我々自身のためでない時、自身のための何等の利益を求めず、しかし、我々の愛するもの、ために、我々が、我々を魅したり、我々に利益あるためにではなく、我々が我々の内に棲む精神を一々のもの、内に認めるために愛する時である。

この方法に於て愛する時のみ、基督が我々になすべく教へ給ふた如く、我々を憎むもの、我々の敵をも愛する事が出来るのである。

六、我々は、どんなに悲惨又は馬鹿なものであつてもそれに関せず尊敬しなければならぬ。

我々は一々の人の内に、我々の内に於けると同じ精神が棲める事を記憶しなければならぬ。肉體と精神と兩方に於て嫌はしき人であつても、我々はこの様に考へ

なければならぬ。即ち、『世にはかゝる奇なる人々もゐるに違いない。我々は彼等に堪へなければならぬ。』と。しかし、若し、我々がかゝる人々に、我々が彼等を嫌つてゐる事を示すなら、最初に我々は不正なものとなり、かくて、我々はその堪へ難き怨恨を招く事となる。

かゝる人は自身を變へる事の出来ない人である。我々が彼に敵意を示すなら、不倶戴天の敵の様に我々と戦ふ以外に彼はどうする事が出来やう。實際、彼が本來の彼となれば、我々は彼に對して善くなるだらう。しかし、彼はこの事が出来ないものである。それ故、我々は、そのまゝで、その人からその人の出来ない事を求めず、彼に要求せず、他の言葉で云へば、今のまゝで變はる事を求めずに一々の人に善くしなければならぬのである。

シヨウベンハウエル

七、あなたの嘗て、愛しなかつた人、罪ありとした人、或はあなたに害を加へた事があるかも知れない人を愛する事に努めよ。

この事に於いて成功すれば、あなたは新しい喜びを知るだらう。丁度輝かしい光が暗を逐ふ様に愛の光は嘗て憎悪のためにあなたが自分を忘れた胸をはればれと喜ばしく照し出すだらう。

八、人間の中の最善なるものは、一切のものを愛する人、彼等が善悪何れであつても、區別する事なく總てのものに善をなす人である。

マホメット

九、仲間との不一致が何故そんなに痛ましく、また仲間から憎まるゝ事が、何故尙更に痛ましい事であるのか。

それは、我々一切のものを人間であらしめてゐる根元が我々一切のものに於いて同じものであり、それ故に我々が他を憎む時、我々は我々總てに於て一つのものであるものと不和となり、我々自身とも不和になる事を我々總てが感じるからである。

十、『私は疲れてゐる、私は落膽してゐる、私は淋しい。』だが誰か總ての人から

あなたを分離する様に、又あなたの孤獨な惨めな無益な自己の牢屋にあなたを閉ぢ込める様にと云つたものがあるか。

十一、あなたが一々の人に、『私のする様に行ひなさい』と云ふ事が出来る様に行爲せよ。

カント

十二、基督の教の主なるもの、汝の敵を愛する事それが守られてゐる事を私が見ない限り私は自身基督信徒と呼ぶものを眞に基督信徒であると信じないだらう。

レツシング

四

霊のみが眞に愛される事が出来る

一、人は自身を愛する。しかし、自身を愛する事に於いて、若しその肉體を愛す

るならばその人は間違つてゐる。かゝる愛は彼に苦しみの他、何物をも齎らさないだらう、自身を愛する事は人が自己を愛する事に於て、その靈を愛する時、しかる時にのみ正しいのである。

そして靈は一切の人に於て同一である。それ故に、若し人がその靈を愛するならば、その人は亦他の人々の靈をも愛するであらう。

二、一切の人は一つの事を努めてゐる、そして絶えずに、その爲に働いてゐる、即ち良く生きる事である。それ故に太古以來、聖者と賢人とは、あらゆる處に於て、その仲間に生活を惡の代り善ならしめるために、如何に生くべきかを教へた。そして一切のこれ等聖者と賢人とは、多くの國と、違つた時代とに於て同一の教を人々に教へた。

この教は簡單にして平易である。

それは、一切の人々が同じ精神に依つて生きてゐる事、一切の人々は同一のもの

であるがその肉體に依つて別々に、生きてゐる事を知つたならば、彼等は皆愛に於て結合するに違ひない事を示してゐる。そして若し人々がこの事を體得しないならば、そして分離せる肉體に依つてのみ生活するならば彼等は互に敵對し且つ、不幸である。

それ故に、全教條は人々を結合する事を行ふ事と、彼等を分離せしむることを避ける事とから成立してゐる。この教を信じる事は容易である。何故なら、それは一人々の人の胸に刻まれてゐるのだから。

三、若し人がその肉體の生活のみを送るなら彼は自己を監禁するのである。靈のために生きるなら、この牢獄の戸は開かれ、人は一切の人に取つて當然のものである自由の喜ばしき生活に導かれるだらう。

四、肉體は靈がそこなはれても、自己の祝福をのみと求める。靈はその肉體がそこなはれても自己の祝福のみをと求める。この争ひは人が、その生命は肉體になくし

て、靈にある事を體得するに至るまで、肉體はそれを以つて靈がその仕事をしなればならない物質に過ぎない事を體得するに至るまで續くのである。

五、二人の人がモスコからキエフへの旅に出で立つならば、一人が他のものとどんなに遠く離れてゐてもそれには關係なく、一人がキエフの門に近づいてさへゐれば他のものが今、モスコを立つたところであつても、明かに彼等は一つ處に着いて相會するだらう。しかし、どんなに彼等と一緒に近くゐても若し一人はモスコへ、一人はキエフへ西で立つなら、彼等はいつとも離れてゐるだらう。人の生活もそれと同じである。

彼がその靈のために生きてゐるならば聖人と、若し彼がその靈のためにのみ生きてゐるならば最も弱い罪人とは同一のもののために生きてゐるのである、そして早晚二つのものは合するに違いない。しかし、二人の人が一緒に棲んで、他はその靈のために生きてゐるのに一人が、その肉體のために生きてゐたなら、彼等は、不可

避的にだんだと離れて行くだらう。

六、何故に、彼等が生きてゐるかを知る事なしに生きる事は人々に取つて困難な事である。しかも、これを知る事が不可能である事に誇りを感じる程の人々があるのである。

しかし、この事は不可能であるのみならず、何故なるかを知る事は必要な事である。人生の意義はだんだと、靈を肉體から獨立せしめて、それを他の靈との結合、一切の主なる——神との結合に屬す事にある。

彼等が、世界の一切の賢人の教と合致して生きず、また、自己の理性や良心の命令とも合一して生きないがためにのみ、この事を知らないと人々は考へたり云つたりするのである。

愛は人間の自然的性質である。

一、人に取つて愛する事は水が低きへ流れるが如くに自然な事である。

東洋の古言

二、その性状の法則に従へる蜜蜂は飛ばねばならず、蛇は這ひ、魚は泳ぎ、人は愛しなければならぬ。若し、愛する事の代りに人が他を傷付けるならばその人は鳥が泳んと欲し、魚が飛ばんと欲するが如く、不自然に行爲するのである。

三、馬は敵からその安全を足の速力によつて得る。馬が鳥の如く歌へない時それは不幸ではない、しかし、馬に當然であるもの、足の速力を失ふ時は不幸である。

犬の最も貴重なる所有物はその嗅覺である。犬が若しそれを失ふならば不幸である、しかし飛ぶ事が出来なくともそれは不幸な事ではない。人に取つても同様で、熊やライオンや邪惡なる敵が制御出来なくとも、それは、不幸ではない、しかし、そ

の最も貴重な天賦のもの、その精神的性状、その愛に對する能力を失つたならば不幸である。

若し、人が死し、その富を失ひ、又彼がその家や國土を持たなくとも、それに悔を感じるな。これ等何れのものも人に屬してゐないものである。しかし、若し人が、その眞の所有その優れたる賜物——愛の能力を失ふならば哀しめ。

エピクテタス

四、聾で啞で盲の小女が觸覺に依つて讀む事と書く事とを教へられた。その教師が愛の意味を彼女に説明する事を試みた時、少女は答へた。『左様です、分りましたそれは人々が互に感じ合ふ處のものです。』

五、支那のある哲學者が科學の意味を訊ねられた。彼は答へたのである、民を知るに有りと。彼は德の意味を訊ねられた。彼は民を愛する事であると答へた。

六、世界の一切の生けるものに取つての、間違なき道しるべが只一つある。こ

の道しるべとは、當然されねばならぬものを行ふ事を一々の生きものに促す宇宙的精神である。この精神は木に日に向つて生長する事を命じ、花に於てこの同じ精神が實を結ぶ事を命じ、種に於てはそれが土に入りて生長すべき事を命ずる。人に於てはこの精神が彼に、愛を通じて、他の生きものとの結合を求め事を命令するのである。

七、印度の哲學者が云つた、母がその子供のみを看護り、乳を飲まし、愛育し、教育する如く、汝等、各人は、世の中に於て最も貴重なる内なる自己を、看護り、育て、啓發すべしと、即ち他を愛する事、一切の生けるものを愛する事である。

一切の信仰はこの事を教へる。バラモンの信仰も、ユダヤ人の信仰も、佛教徒の信仰も支那人、基督者、モハメット教徒の信仰も。

それ故に、世の中に於て最も必要な事は愛する事を學ぶ事である。

八、支那に三人の賢者がゐた——孔子と老子と道とである。最後のものは殆んど

我々に知られてゐない。道は人は、権力や富や勇氣でなく、愛のみを尊敬する様に訓練されねばならない事を教へた。彼は云つた、人は一切の他のものよりも、富と榮とを尊敬しなければならぬと教へられてゐる、そして彼等は富と榮とに達する事にのみ意を用ひてゐる。しかし、彼等は一切の他のもの以上に、愛を尊敬し、その生活に於ては他の人々への愛を達つする事に意を用ひ、愛する事を學ぶためにその最大限の盡力を用ゆる様に訓育されねばならないと。

何等の注意も、彼には拂はれなかつた。孔子の弟子の一人が、人は愛のみにて生るものにあらずと云つて、彼に反對した、そして支那人は後者に従つた。五百年過ぎて基督が道と同じ教を教へた。彼のみが更に強くはつきりとこの教を齎らしたのである。しかし今ですら、愛の教義に就いてのは云ひ争ひはないけれども、基督の追隨者はこの教に従ふ事が出来ないのである。

しかしその時は近づきつゝある、速かに近づきつゝある、その時には人はこの教

に従ふ事を避ける事は出来ないのであらう。これは人々の胸に植付けられてあつて、それに従はなければ、それは人をして絶えまなく苦しませるからである。

九、人々が争ひをやめ、闘ひをやめ、人を殺す事を止める時、彼等が互に愛する時が必ず来るに違いない。この時は正に來らんとしてゐる、何故なら、人々を嫌悪する感情でない、仲間への愛が人々の靈に植ゑられてゐるのだから。この時を早めるために、内なる我々の全力を盡さうではないか。

六

愛のみが眞の祝福を齎す

一、あなたが、善なる事を求める、若し、あなたが一切のものにとつて善である善を求めさへすればあなたの求めてゐるものにあなたは達つするだらう。愛のみが

それに應ずる事が出来る。

二、『その生命を救はんとするものは生命を失ひ、善のためにその生命を興へるものは生命を救はれる。全世界を得ても、その靈を失ふなら、それは人に如何なる利益となるであらう。』

かく基督が云つた。そして同様に、邪教徒なるローマ皇帝マーカス、オウレリアスが云つた、即ち、『おう我が靈よ、何時』と彼は自身に話しかけた『御身は余の肉體の主權を得るのであるか。何時御身は一切のこの世の欲求と哀しみとから自由となり、人々が死或は生を以つて御身に仕へる様にと要求するのを止めるのであるか。何時御身は純粹の善が常に御身の力の中にあり、純粹の善が只、一つの事に依つてのみ、即ち、一切の人々を愛する事に於てのみ成立する事を知るのであるか。』

三、自分が光の内にあると云つて、その兄弟を憎むものは今に至るも尙暗の内にゐるのである。その兄弟を愛するものは光の内にて、彼には置く何等の機會もな

しかし、その兄弟を憎むものは暗にゐて、暗の内を歩み、そして又自分が何れに行くべきであるかをも知らない。暗がその目を盲としたのだから、……口と言葉とで愛せず、行爲と眞實とで愛しやうではないか。

そして、此を以つてのみ、我々は我々が眞理の子であり、神の前に我々の心を保證し得る事を知る。

ヨハネ第一書

四、これかあれか、何れの宗教的教師が眞であるか、私は知らないし、また知る事も出来ない、しかし、私になし得る最善の事は私の内の愛を増す事である、この事を私は確かに知つてゐる。そしてその事には何等の疑ひも存しない。私の内なる愛の増加は直ちに私の幸福を増すが故に、これに就いては何らの疑ひも持ち得ないのである。

五、一切の人々が眞に一つのものであつたなら、我々が我々自身の個人的生命として理解するものは（我々の生命は他から分たれてゐる。）かゝるものではないだらう、何故なら、我々の生命は結合してゐないものと結合する事に努力する事を努めてゐるものであるのだから。結合せざるものとしての我々の増し行く不斷の結合の内に眞の生活と人生の一箇の眞なる祝福とがある。

六、我々は凡ゆる事を發見する、しかし我々は我々自身を發見しない。何と云ふ不思議であらう。

人は世界に多年生活してゐる、しかも、何時、如何なる時、生活全體の中にて最も心良く感じたかを陳べる事が出来ないのである。

若し、人がこの事を観察しやうとさへすれば、彼ははつきりと如何なるものの中に眞の幸福があるかを理解するであらう。人はその靈の内に他人への愛がある時にのみ幸福を感じる事を彼ははつきりと理解するであらう。

明かに、我々がこの事を発見しないならば、孤獨で我々は我々自身の自己とも殆んど交渉を持たないであらう。

我々は我々の靈を汚して了つて最早、我々に必要なものを知らうと努めない。

人生の虚榮の中で假りに我々が自己の内部を見んと足を止めるなら、我々は、何處に眞の幸福があるかを発見しなければならぬ。

我々の肉體は弱い、不潔な、亡びるものであるがその内に寶が、神の不滅の精神がかくされてゐる。若し、我々が我々の内にその精神を認めるなら、我々は我々の仲間を愛するだらう。そして若し、我々の仲間を愛するなら、我々は我々の胸の求めてゐる事の凡て、に達するだらう、我々は幸福になるだらう。

スコボロダ

七、肉體の生活が如何に頼むべからざる、慘めなものであるかを、認められた時にのみ人は愛が齎す事の出来る一切の祝福を認める事であらう。

八、一切の種類の物質的幸福と喜びとは他のものから奪ふ事に依つてのみ達せられるものである。その反對に精神的利益と愛の祝福とは他人の幸福を増す事に依つてのみ達せられる。

九、一切の我々の近代の進歩、鐵道、電信機、一切の機械の種類の如きは人々の結合のために有用かも知れない、又それ故に神の國を速かに來らせるためにも有用かも知れない。

しかし、心配な事は人々がこれらの改良に迷はせられる様になり、又彼等がだんだん機械を發明するならば、彼等が早く神の國を來らせる事が出来ると思ふ様になる事である。

これは、種を播く事なしに、土地の同じ部分を再三耕してゐた人の様に、悲しむべき誤りである。これら總てのものが眞に有用であるためには人はその靈を完全なものにして、愛を啓發しなければならぬ。愛なくして、電話も電信も飛行機も人を結

合する事は出来ないのである。反対に、それは彼等をだんだんと遠く分離せしめる。

十、その脊に垂れてゐる何もものかを探し求めてゐる人を見る事は氣の毒でもありまた、馬鹿馬鹿しくもある。そして、人が幸福はその胸に植えられた愛からのみ出来てゐる事を知らないで幸福を求めるのは氣の毒でもあり、また馬鹿馬鹿しくもある。

世間と人の行爲とを見ず、御身自身の靈の内を見るならば御身は其處に、御身がそのものない處に求めてゐた幸福を見出すだらう、愛を見出すだらう、そして愛を見出せば、それを所有したものはそれが他の何ものをも求めないだらう程の幸福である事を知るだらう。

クリシナ

十一、あなたの云ふ事が聞れない時、あなたが人々を怖れる時、あなたの生活が困却した時には、あなた自身に云ひ聞かせなさい、即ち、私がどうなるかに就いて心配させないでおくれ、私の觸れる一切のものを愛させておくれ、如何なる事が

來ても私を満足させて置いておくれ、と。正に、この様に生る事を試みよ、しからば御身は一切のものが如何に正しいかを見るだらう、そして、御身は怖るべき事も、望むべき事もなくなるだらう。

十二、彼等が御身を尙更に愛し得んために汝の友へ善をなせ。

汝の敵へ、彼等が汝の友となり得んために善をなせよ。

クレオプロス

十三、舟の底に穴があいてゐる時、舟から、凡ての水がもれ出る様に、丁度そ一切の喜びや愛は、たとへ彼が只一人の人のみを嫌つたにしても彼が憎悪を臆するならばその人の靈から離れて行くだらう。

十四、或る人は云ふ、人が善に對して惡を以つて酬ゆるならば、他に對して善をなす事の意味は何處にあるのであるか。しかし、若しあなたがあなたに善をなした人を愛するならば、あなたは彼に對するあなたの愛の内に、その酬を得てゐるの

である、そして、愛するのために、彼があなたに與へた惡にあなたが堪へるならば尙偉大なる報酬をあなたは受けるであらう。

十五、ある目的を以つて、若し、善行が行はれたならば、それは最早、善行ではないのである。眞の愛とは、何故かも、何の目的かも知らずしてあなたが愛する時の事である。

十六、人々は屢々若し彼等がその仲間を愛するならば神の前に功績を贏ち得たと考へる。しかし、仲間のものを愛しても、それは神の前に功績を贏ち得たのではなくて、神があなたに値しなかつた何かをあなたに許したのである、即ち、人生の最も偉れたる幸福、愛を。

十七、『我等は兄弟を愛するが故に、死より生に入れられたる事を知つてゐる。その兄弟を愛せざるものは死の内に棲んでゐるのである。』

ヨハネ傳一、三一—十四

十八、然りその時は來るであらう、基督が來る事を願ひつゝ語つたその時は速かに來るであらう、人々が、他の人の上に、暴力によつて主權を握らず權利をその勞働の實によつて握るを誇る時、他の人の美望や怖れを起す事を喜ばず一切の人を愛する事に誇りを感じ、一切の惡から彼等を救ひ出す愛の感情を、他によつて困苦せしめられる一切の傷害にも關せず成育する事を喜ぶ時が、來るであらう。

十九、愛に關する一つの譬喩がある。

嘗て、自己に就いて考へた事も注意を拂つた事も決つてない人があつた、しかし、何時も、その仲間の事を考へたり注意してゐたのである。そしてこの人の生活は天使がその善良なるに驚き、それを喜んだ程不思議なものであつた。

そして天使の一人が他の天使に云つた、この人は神聖である、そして彼はその事すらも知らないである。世界にかゝる人はまづないのである。どうして我々が彼に仕

へる事が出来るかを訊ね様ではないか、彼の要求するどんな捧げものでも我々は彼に與へる事が出来る、と。そうしやうと他の天使が答へた。そして見えざる聴き取れぬ天使の一人はしかも、はつきりと明白に聖人に云つた、我々は御身の生活とそ
の聖とさを見ました、そして我々は如何なる捧物をあなたに與るが良いかを知りたく思ふのです。あなたの欲するものを云つて下さい——あなたの見、あなたの同情する一切のものの缺乏を必要の救濟する事も、我々には出来るのです。或は又、あなたは我々へ、我々があなたの同情を持たれる人がその天壽を全うせずして死なないがために若痛と苦しみとから彼等を守る力をあなたに許す事を欲しますか。これも亦我々の力の内にあるのです。或はまたあなたは世界の一切の人、男や女や子供があなたを愛する事を欲しますか。我々はこの事も亦なす事が出来るのです、只、あなたの胸の求めるものを云つて下されば良いのです、と。そして聖人は答へた。これ等の何れも私は求めません。その訪問、おまづれ必要や苦や、苦痛や時ならぬ死

から人を守る事は神の事である。そして人々の愛に關しては、人々の愛が私を誘ひ、人々の愛が神と仲間の人への私自身の内なる愛を増すと云ふこの私の最ももの關心事を妨げるかも知れない事を怖れる。』と、そして天使は云つた、然り、眞に、この人は眞の聖さを持てる聖き人で、眞に神を愛する人であると。
愛は與へるけれど何の執酬をも求めない。

罪、誤謬、及迷信

人間の生命は若し、迷信や誤謬や罪が此等の天恵を喜ぶ能力を人から奪ひ取らなかつたなら祝福の絶えざる源泉となるだらう。

罪は肉體の情熱の放縱であり、誤謬は世界に對しての人間の關係の誤れる想念であり、迷信は宗教と見なされたる誤れる信仰である。

一、耕作人が正し、鋤をやるのを失尻つてそれが、すくひ上げねばならなかつたものをすくひ上げずに溝から外れた時、露西亞の農夫はこれを罪だと名稱ける。

それは生活に於ても同じ事である。

罪とは人がその肉體を正しい溝に導き誤り、當然なすべき事を逸つし逃す時の事である。

二、その青年時代に人生の眞の目的、愛を通して他と結合すると云ふ事を知らない人々はその肉體の情熱の満足の内にもその目的を見出すのである。この欺瞞が心意の欺瞞に止るならそれはそんなに悪い事ではない、しかし肉體的情熱の満足は靈を汚し、その靈の汚されたる人は放縱なるその生活を通して愛の内にもその幸福を求め能力を失ふのである。それは純粹な水を飲まふと求めてゐる人が、自分がそれから飲まんとする杯を汚すが如きものである。

三、あなたが出来る限り肉體に多くの喜びを與へんとあなたは欲する。しかし、あなたの肉體は永く生きてゐるものであらうか。肉體の喜びを心に掛ける事は丁度氷の上に家を建つるが如きものである。

かゝる生活に、如何なる喜びが、如何なる安心があり得やう。あなたは、早晚、氷が溶ける事を怖れないのだらうか。それは早晚あなたはあなたの死する肉體を離れないのか。堅き土にあなたの家を移せ、死なざるもののために働き、あなたの靈を改善し、あなた自身を罪、誤謬、及迷信から自由なものにしなさい。

希臘のスコポロダ

四、子供はその靈に就いては知らないである、そして、成人の場合に於ける自身を見出す事は出来ないのである。成人は自己の内に二つの争へる聲を聞く——そして一つは『汝自身食ふべし』と云ひ他は『求むるものに食はしむるために與へよ』と云ふ。一つは『報いよ』と云ひ、他は『許せ』と云ふ。一は『汝に語られし事を信せよ』と云ひ、他は『汝自身思惟すべし』と云ふ。

人が年とればとる程、屢々人はこれ等二つの争へる聲、一は肉體の聲であり、他は精神の聲なるものを聞く。

幸福なのは肉體の聲ではなく、精神の聲に聞く様にと自身を訓育した人である。

五、あるものはその胃の放逸の上に生活の基を置き、他のものは又肉慾、或るものは權力、或るものは世間的な名聲にその生活の基を置いて、これらの目的に到達するためにその勢力を消費するのである、しかし、只一つの事、一つの事のみが必要なのである、即ち、その靈を教養する事である。

この事のみが眞の幸福を彼等に與へる事が出来る、その幸福は彼等から何人も奪ふ事の出来ないものである。

六、人は二君に仕へる事は出来ぬ。彼は一を憎み、他を愛するか、或は別に、一つを持つて他を輕蔑するか何れかであるからである。

御身は神と富とに仕へる事は出来ぬ。

マタイ傳六の二十四

七、あなたは同時にその靈と世間的な幸福とに注意を拂ふ事は出来ぬ。

世間的幸福に達せんと欲するなら、その靈を見捨てよ、その靈を救はんと欲するなら世間的幸福を見捨てよ。しからずんば、あなたは二つの間によるめくのみで、前者にも後者にも、その何れにも達つし得ないだらう。

八、人はその肉體をその意志を遂行する事から檢束したり、邪魔する種々なる事から安全に身を守る事によつて自由に到達する事が出来るだらう。この中に悲むべき誤謬があるのである。彼等はその肉體を一切の障害物から即ち、富、名譽、光榮、彼等の求める自由を彼等に拒否するものからその肉體を保持するために、この警戒を用ゆべきであるのに、彼等は反對に一層堅く自分を此等一切のものに括るのである。大なる自由に達するためには人は自己の罪や誤謬や迷信の外に自身牢屋を建て、その内に自分の自由意志から自身を禁錮しなければならぬ。

九、この世界に於ける我々の生活の目的は二重である。第一は出来る限りの生長にまで我々の靈を齎す事で第二は地上に天の王國を建設する事である。二つの目的

は同じ方法によつて達せられる、即ち、我々の靈の内に置かれてゐる精神の光を我々自身の内に實現する事によつてである。

十、眞の道は眞直にして自由である、そしてあなたがそれを歩むならば躓く筈のないものである。地上の生活の俗事にあなたの足が絡んだ瞬間にあなたはその事を感^くじる、これと同じ表^く號によつてあなたはあなたが眞の道から迷ひ出でた事を知れ。

二

罪とは何であるか

一、佛教の教に依れば五大律がある、即ち、一には故意に生物を殺すこと勿れ、二には他人が自己のものとして信するものを我物とする勿れ、三には純潔なる事、四には嘘言を云ふ事なかれ、五には酩酊及喫煙によりて自己を麻醉せしむる事勿れ、こ

れである。

それ故に佛教徒は罪として下のものを教へる、即ち、殺生、偷盜、姦淫、飲酒、
嘘言である。

二、福音書の教へに依れば愛の二つの律法のみがある。

即ち、法律家が、彼を試みて、主よ、律法の中、何れのが最も大切であるかと云ふ質問をした。

イエスは彼に汝の心を盡し、精神を盡し、意を盡し主なる汝の神を愛すべし。と云つた。

これが第一にして最大なる律法である。

而して第二もこれと同じである、即ち、汝自身の如く汝の隣人を愛すべしである。

マタイ傳二十二、三五—三九

それ故に、基督教徒の教義に依れば罪とはこの二つの律法と合せざるもの事である。

ある。

三、人はその罪のために罰せられず、罪それ自身に依つて罰せられる。

そしてこれは最も厳しき確かなる罰である。詐欺師や暴漢が、その一生を送つて繁榮と光榮の中に死ぬるかも知れない、しかし、これは彼が、その罪の罰から逃れた事を意味しない。何人のゐた事もなく、何人のゐる事もないであらう何處かでの罰は課せられる事はないであらう、しかし、これは此の點で正しく強制されてゐたのである。新しい罪がその喜びを段々に減じ、愛される眞の幸福から人を段々遠く去らしめる、人の罰は正しく此の處にあるのである。醉漢に於ても同様で、人が酩酊の故に罰しても罰しなくても、常に彼はその酩酊に依つて罰されてゐる——頭痛と酔醒の悲しみの加はる事に依つて彼が飲めば飲む程、彼の肉體と靈は悪くなるからである。

四、若し人がこの人生に於て彼等が罪から自由であると想像するならば、彼等は

非常に誤つてゐる。

人は多少は罪あるものであつて、全然罪なき事は決つして有り得ない事であるから、

生ける人は罪なきを得ないのである、何故なら、人の全生涯は自身を罪から解脱する事にあつて、只、この罪からの解脱の中にのみ人生の眞の幸福があるのである。

三

誤謬と迷信

一、人生に於ける人間の仕事は神の意志を満す事にある。

神の意志は人に、その靈の愛を増し、世界にそれを表現せしむる事である。

人はどうして自己の内に愛を表現すべきか。正にこの一事である、即ち、その表現を妨げる一々のものを自己の内から逐ひ出す事である。

何が愛の表現を妨ぐるのであるか。

罪が愛の表現を妨ぐるのである。

かくて只一つの事のみが神の意志を満すために人に必要となる。

自身を罪から脱せしむる事である。

二、罪を犯すことは人間の事であるが、罪への辯解を求める事は悪魔の仕事である。

三、人間であるのに理性を持たないものは獸の如く生活する、そしてその行ふ處善惡何れにするも彼は耻知らずである。

しかし、彼が何を爲すべきか何を爲すべからざるかを判断する能力を得る時はやつて来る、かくして理性が彼に爲すべきまた爲すべからざる事を知る事を許した代

りに、彼が彼に喜びを與へ、彼に習慣的なものとなつてゐる悪行への辨解を見出すために理性を用ひると云ふ事が起る。

これが、それ故に世界の苦しむ誤謬と迷信に人を導く處のものなのである。

四、自分は罪がない、そして自身に就いて働く必要がないと考へる事は、人に取つて悪い事である。

しかし、自分は全然罪の中に生れて來たものである、そして罪の中に死ぬるのであらう、それ故に自身に就いて働く必要もないと思ふ事は彼に取つてまた同じく悪い事である。

兩方の迷想が等しく有害である。

五、罪ある人々の中で住むものが自己の罪と他の罪とを見ないならばそれは悪い事である、しかし更に悪いのはその中で彼が住んでゐる人々の罪を見て、自己の罪を思はない人の状態である。

六、人間の一生の最初の時期には肉體のみが發達する。そして彼はこの肉體が自身の自己であると考へる。彼の靈の意識が彼の内に目醒めた時ですらも、彼の靈の欲求と反對なる、それに依つて彼が自己を傷付け、誤謬と罪とに陥入らしめる肉體の欲望を満す事を彼は續ける。

しかし彼が長く生くれば生くる程、その靈は一層聲高く語り出で、一層遠く肉體と靈との欲望は離反する。

その肉體は老ひ、その要求は段々衰へ、しかしその精神的『自己』は益々豊滿になつて來る時が來るであらう。かくて、その肉體に仕へる習慣にゐた人々は、その古い生活の習慣を捨て去らない爲に罪を續ける事を彼等に許す誤謬と迷信とを發明する。

しかし、如何に多く人々がその精神的『自己』からその肉體を守つて見るも、それと關せず、尙、前者は常に後者を征服する、それは人生の最後の瞬間に於てでは

あるけれども。

七、最初犯した、一々の誤り、罪があなたを縛る。しかし最初にはそれは蛛の網の如くに軽く縛るのである。再びあなたが罪を犯す時蛛の網は糸となる、かくてまた綱となる。

絶えざる反復であなたは強い綱で罪に縛り付けられ、そして後には鎖で縛り付けられる事となる。

罪は最初はおあなたの霊の内では異國人なのだ、それから賓客となる、そしてそれをあなたが習慣とした時、それは主人となるのである。

八、人がその下に於て行爲の悪性を實現するに破れる霊の勢は、人がその行爲を吟味するために理性を用ふる代りに彼がそれと合つて誤謬と迷信とに落ち入つて了つてそれをその行爲を辯解するために用ふる時に優勢となる。

九、最初に罪を犯したるものは常にその罪を感じる。同じ罪を何度も反復せるも

のは特に、人々がその全周囲にゐて、同じ罪を犯した時に限り誤謬に陥り、その罪を感じる事を止める。

十、人生に入る若い人々は新しい知らない道に踏み入る、そして何れの側にも慣れない横道を見出す——滑かな、誘惑的な、喜ばしい。彼等がこの横道に最初踏み迷ふ時、彼等には歩く事が非常に喜ばしい事に思はれる、長い路をそれに沿つて共足で行く事が出来る様に、それから本道へ何時でも思つた時に歸へる事が出来る様に思はれる、しかし、彼等は直ちに、自分等がその歸へり道を見出す事が出来ず、段々遠くその滅亡へと踏み迷ひつゝある事を知る。

十一、人が罪を犯し、彼が罪を犯した事を知つた時、彼に通じてゐる道が二つある。一つはその罪を認めてそれを繰り返さない事を努める事で他は自分の良心を疑つて、かゝる罪を人が何と云ふかと問ひ、若し人が責むる事なくば、この罪を赦し、その罪を認めない事である。

『彼等は皆この事を行つてゐる。どうして他の人々がしてゐるのに自分のみしてはならないのであらう。』

まことに人がこの挫けたる道に踏み入るや彼はどんなに遠く善き生活の道から踏み迷つたかを認め得なくなるだらう。

十二、誤謬と迷信とは人間の全周囲を取巻いてゐる。

此等の危険の中を歩む事は常に沈み行きながら安全の方に這ひ上らんとして沼澤の中を歩くが如きものである。

十三、誤謬は世界に來なければならぬと基督が云つた。この言葉の意味は眞理の認識が、それ丈では人々を惡から轉じ善なる方に彼等を引く事に十分でないと言ふ事であると私は考へる。眞理を人々の多數が理解するためには、誤謬と迷信とのために、錯誤と錯誤に由來せる苦しみの極度とへ齎されて見なければならぬのである。

十四、罪は肉體のものであり、誤謬は人々の思想から來、迷信は自己の理性の不

信から起るものである。

十五、良き靴をはける人は注意深く泥を避ける、しかし一度彼が失錯をやり、その靴を汚すなら彼は殆んど注意をせず、そして、非常に汚れてゐるのを知つた時には無遠慮に泥の中に踏み入り、段々一步毎に不潔物を積むものである。それと同様に、若い人は、未だ惡と不道徳との行爲に染まらざる間は注意深く、惡なる一切のものを避ける、しかし、一二の過ちを犯した後は、どんなに注意しても問題ではない、自分は墮落せんとしてゐる事を推論し初めかくして彼は一切の惡徳を取り上げる。かゝる手本を見習ふ事なかれ。

あなたは自身を汚した事があるか。汝自身を清めよ、二重に注意深くあれ。あなたが罪を犯した事があるならば、後悔せよ、そして益々罪を避けよ。

十六、肉體の罪は年と共に沈む、しかし、過失と迷信とは反對に年と共に更に強くなる。

四

人間の生活の主なる仕事は罪と誤謬と迷信とから自身を逃れしむる事である。

一、人はその肉體が牢獄から釋放された時歡喜する。

どうして人はその靈を捕へてゐた罪、誤謬、迷信から釋放される事を喜ばないのであらう。

二、その情熱と闘ふ事なく、只その獸的生活のみを送れる人を思ひ見よ、それは何と云ふおそろしい生活であらう、人々の中にて何と云ふ憎むべきものだらう、何と云ふ放埒、何と云ふ慘酷だらう！

人々がその罪と誤謬と迷信とに對する弱さと情欲と闘争とを知つてゐることの事

實のみが、人々に對して共に棲む事を可能とするのである。

三、人間の肉體はその内に棲める精神を限つてゐる。しかし、精神は破り出でて段々自由になる。この事の中に人生があるのである。

四、人の生活は彼が欲しても欲しなくても何れにしても段々罪からの釋放の方へと遠く彼を導いてゆく。

この事を體得した人は自身の努力でこの方法に於て生活を扶助する、そしてかゝる人の生活は幸福なるものとなる、何故なら彼は彼と共に行爲せるものと一致してゐるからである。

五、子供等は未だ罪の習慣を得てゐない、それ故一切の罪は彼等に拒絶される。成長せる人々は既に誤謬に落ちてゐて、この事なしに罪を犯すのである。

六、若し人が罪を認めないならば、彼は堅くコルク栓をさされてゐる罐と同じである。

罪から彼を釋放する處のものを受け入れる事が出来ないからである。自己を辱め後悔する事は容器の栓を抜く事である——罪から釋放される資格を得る事である。

七、後悔する事はあなたの罪を知る事である、そして罪と闘ふために容易する事である。それ故にあなたに力のある限り後悔するが良い。

油は未だ火の燃えてゐる内にランプに加へられなければならない。

八、二人の婦人が忠告を求めに隠遁者の下に來た。

一人は自身を大罪人と信じてゐた。若い時彼女はその夫に不忠實であつた、そしてそれ故に彼女は自身を責める事をやめなかつた。

他のものは法律を守つてその生涯を送つたそして自身に責むべき罪を見出さず、自身に満足してゐた。

隠遁者は二人の婦人の生涯に就いて注意して聞いた。

一人はその大なる罪を涙をながして告白した。罪が許しを豫期出来ない程大きな

ものだと考へてゐた。

「他のものは、彼女が犯したかも知れない何等の罪も知らない事を云つた。

隠遁者は第一の婦人に云つた。

「汝、神の下婢よ、壁の後に行つて、私に汝が擧げ得る限りの大いなる石を見出して、それを私に持ち來たれよ、」そして、「汝は」と彼は他の婦人の方に向き、「同様に壁の後に行きて私に汝の運び得る凡ての小石を持ち來たれよ。」と云つた。

婦人等は命に従つた。

一人は大きな石を、他のものは小石を滿した袋を持つて來た。

そこで隠遁者は更に云つた。

「さて私は汝等の爲すべき事を語ろう、再び、これ等同じ石を持ち、それを汝等の取り來たつた處へ還せ。それから再び私の處へ歸り來たれ。」そして婦人は彼の命を果す事を急いだ。

第一の婦人は容易に彼女がのそ重い石を取つて来た處を見出して彼女がそれを見出した處に還して来た。しかし他の婦人は何なる手段に依つてもしかと彼女がいゝろいろな小石を摘り上げた處を思ひ起す事が出来なかつた。そして隠遁者の命を果し得ずして、彼へ歸つて来た。

「それは罪に於ても丁度同じ事である」と隠遁者は云つた。

「汝は汝がそれをそこから取り來つたその場所へ重い石を還した、何處からそれを取つたかを知つてゐるからである。そして汝は同じ様に出来なかつた、汝は凡ての小さな石を何處から取つて來たかを思ひ出せなかつたからである。

罪に於ても同じ事である。

「汝は人々の批難と良心の悲痛とを堪へて、その罪を記憶してゐた、かく汝はその罪と罪の結果とから自己を救つて謙遜であつた。

「しかし、汝は（隠遁者は他の女に向き）小さい方法で罪を犯して小罪を記憶せず

悔いず罪の生活に慣れて、他人の罪を求めて、更に深くも汝の罪の泥土に沈んだのである。

九、人は罪の子である。一切の罪は肉體から來る、しかし、人の内なる精神は肉體と鬭争する。そして人の全生涯は精神が肉體に對する戰である。幸福な人はこの鬭争に於て自己を肉體の味方としてではなく（肉體は打ち破られる事になつてゐる）人間の最後の刹那に於てではあるけれども勝利を制する事に決定してゐる精神の味方として自己を見出す處の人である。

十、人々の信用と許しとを通じて罪から救ひ出されると考へる事は大いなる誤謬である。如何なるものも罪から救ふ事は出来ぬ。

人はその罪を體得してそれを繰り返さない事を努める事より他に仕方がない。

十一、罪に脅かされるな、自分に次の様な事を云ふな。

「私は罪を犯さざるを得ない、私はそれに慣れて了つてゐる、私は弱いのだ」と。

生命の繼續する限り、あなたは常に罪と闘ふ事が出来る、そして今日若しあなたがそれに打ち勝てなかつたならば、明日、若し明日も打ち勝てなかつたならば、その時にはまた翌日の事である。若し翌日も打ち勝てなかつたならばつと死ぬ前にである。

しかし、若しあなたが戦ふ事を拒んだならば、あなたは生活の重要な仕事を怠るのである。

十二、あなたは自己に愛する事を強ふる事は出来ぬ。しかし若しあなたが愛しなかつたならば、それはあなたの内に愛のない事を意味するものではない、只愛を妨ぐる處の何ものかがあなたの内にある事を意味する。

あなたは意のままに壘をさかさにしたたり、振つたりする事が出来る。しかし若しそれが栓がしてあつたならばあなたがコルクを取らない限りそれからは何者も注出しないだらう。

それは愛に就いてと同じ事である。

あなたの靈は愛に満たされてゐる、しかしこの愛は表現されないものである、何故ならあなたの罪がそれを過ごさせないからである。それを塞ぐものからあなたの敵を救ひ出しさへすればあなたがあなたの敵と考へ、あなたが憎んでゐたものをも、一切のものをあなたは愛する事が出来るだらう。

十三、罪から自己を救ひ出したと云ふ事を自身に云ふ人こそ禍なるかなである。

十四、内に神と一切の精神的生命とに一つである意識を持たないものは罪なきものである。

かくて植物と動物とは罪からは自由のものである。しかし人は同時に、内なる神と動物とに一つなる事を意識してゐる。それ故に罪なきを得ない。我等は子供等を無辜のものと呼ぶ、しかしこれは誤謬である。子供は罪から自由ではない。彼は成人よりは罪少きものである、しかし彼は既に肉體の罪を持つてゐる。何れにしても

罪から自由である最も聖なるものはない。

彼は他のものよりも少く罪を犯してゐる、しかし、たしかに罪を持つてゐる、罪なくて生活はないからである。

十五、罪と闘ふ様に自己を訓練するためには、あなたが、その肉體を統べてゐるあなたの肉體があなたを統べてゐるか、その何れなるかを學び知るために習慣になつてゐる事を行ふ事を時々やめる事が適當である。

五

罪、誤謬、迷信、嘘偽の教の精神的生命の表現に對する意義

一、神が世界を造つたと云ふ事を信する處の人はよくこう云ふ事を訊く。

何故神は人が罪を犯さねばならず、又罪を犯さざるを得ない様に人を造つたので

あるかと。

これは何故に神は母親が子供を苦しんで産みそれを看守り、成人せしめなければならぬ様に母親を造つたかと訊く様なものである。

神に取つて母親に、出産の苦痛なく、看守りや注意や怖れのなき、全く出来上つた子供を與へるといふ事は何でもない事ではなかつたらうか。

如何なる母親もかゝる質問はしないのである。何故なら、その苦痛故に、彼女は彼女に價ある子供を愛するからであり、彼女の生活の喜びは子供を看守り育て上げ注意する事にあるからである。

人間の生活に就いて云ふも同じ事である。罪、誤謬、迷信、それ等との闘ひ、それらの征服——この内に人間の生活の意味と喜びとがあるのである。

二、その罪を知る事は人間に取つては大なる重荷である。しかしあなたが彼等から救はれてゐる事を感じる事は大なる喜びである。

しかし、夜には、我々は太陽の光の中に楽しむ事は出来ないものである。

罪の中にある人は正しさの喜びを知らないであろう。

三、若し人が霊を持たなかつたならば、彼は肉體の罪を知らないだろう、そして靈が肉體の罪に反対しなかつたならば、人は霊を持つてゐるのを知らない事だらう。

四、理性ある人がこの世界にあつて以來、彼は悪から善を區別した、そして悪から善を區別し、悪に對して闘ひ、眞なる善の道を求め、遅々と、しかし斷固として、正道を進む事に、既に死んだ人々の經驗を用ひた。

そして常にこの道を遮つて、罪と誤謬と迷信とは人々と對抗したのである。そして彼等人々に一切の此等のものは無益なものであり、これの中の何ものも求める必要はないもので、人々はそれなしにも甘く行くし、生きる様に造られた通りに彼等は正しく生きて行くべきである事等を囁いたのである。

五、罪と誤謬と迷信とは生命に發芽する愛の種を蔽はねばならぬ土である。

過 多

人の唯一の眞なる幸福は愛にある。しかし人がその内なる愛を啓發する代りに、肉體の嗜好を開發する時人はこの幸福を失ふものである。

一

一切の過多なるものは肉體と魂とに有害である。

一、肉體はそれが要求される時にのみ奉仕されねばならない。

しかし肉體的喜びを工夫する事に人の理性を用ふる事は外的に生きる事である。

即ちそれは魂に仕へて肉體を抑へる事の代りに、魂を抑へて肉體に仕へるのである。

二、要求が少なれば少なる丈、その生活は幸福である。これは古は眞理であるが一切の人々に受け入れられなかつたものである。

三、あなたが奢侈に自身を慣れしむればしむる程あなたは束縛の中に落ちて行く、あなたが色々なものを要求すればする程あなたはその自由を減ずるからである。

完全な自由は全く何もをも要求しない事の内であり、それに次ぐものは僅少をのみ要求する事の内にある。

聖クリソストム

四、自己に對する罪があり、人々に對する罪がある。人々に對する罪は自己の内にある神の精神への尊敬を破るにある。

五、あなたが幸福にして自由なる生活を送らんと欲つするならば、それなくとも喜し得るものを求めない事を學べ。

六、肉體が要求する一切のものは容易に獲得される。不必要なるもののみが得る

事は困難なのである。

七、あなたが要求されるものを得んとする事は最もな事である。しかしあなたの持てる以上を欲しない事は更に良い事である。

メネデム

八、若しあなたが丈夫で疲れるまで働いたならば、あなたのパンと水とは富めるものの一切の彼が珍味よりあなたに甘く味はれるだらう。あなたの藁の床はパネ仕掛の褥より柔かに感じられ、仕事着はびろうどや毛皮の衣服より更に滑かにあなたの肉體を撫するだらう。

九、あなたが若しあなたの肉體を餘りに氣隨にすればあなたはそれを弱くするのである、併し、若しあなたがこれかあれかを撰ばなければならぬならば、肉體を弱めるより、疲れしむる方が良い。若しあなたが不適當に寢食すれば、或は又自身を過勞せしむれば、あなたの肉體は直ちにあなたの過失をあなたに思ひ起させるからである。若しあなたがあなたの肉體を氣隨にすればそれは、すぐに、はあなたの過失

をあなたに思ひ付かせず、しかし非常に後に——衰弱と病氣とを通じて思ひ起させるだらう。

十、ソクラテスは飢を慰する爲にではなく主としてその風味のために食せられる一切の食物を絶つた。そして彼は彼の門弟に同じ様にする事を説いた。食料と飲料との過剰は肉體に對するのみならず亦精神にも有害である、そして彼の忠告は食慾が尙残つてゐる内に食卓を離れる事であつた。

彼は彼の門弟に昔のユリセスを思ひ起させた。女妖術者は只ユリセスが飽食を拒んだのみでユリセスを誑はし得なかつた。しかし彼の仲間が彼女の珍味を貪り食ふやがや彼女は彼等を豚に化したのである。

十一、自身、教育あるものと呼ぶ人々である富める有識の人々は飽食、酒亂、美服には何等良いものもない事を了解せる事と思れる。

しかし彼等こそ美味なる食料、魅醉せしめる飲料、一切の裝飾の種類を發明した人

々である。加ふるに彼等の模範は勞苦する人々を衰微せしめ傷ふ。

「教育ある人々が贅澤な生活を樂しむなら、それは正しい事に違いない。」と勞働者は云ふ。そして富めるものを模ねる事を努めて彼等は自己の生活を衰微せしめる。

十二、今日、人々の多くは生活の幸福は肉體に仕へる事にあると考てゐる。この事實から來た最も一般的な教は社會主義者の教だと見られる。この教によれば僅少の要求の生活は獸の生活であり、人間の要求の増長は教育ある人の第二のしるしであり、人間の品位の自覺の眞のしるしである。我々の時代の人々は僅少なる人間の欲求の中に人間の幸福を見出す、かの賢き人々を嘲笑する迄にも強くこの教を墨守してゐる。

十三、奴隸が如何にして生きる事を願ふかを思ひ見よ。第一に彼は自由にされる事を憧れる。如何なる他の方法に依つても自由又は幸福になれない事を彼は考へる。彼は獨語する。若し私に自由が與へられたなら、私は直ちに幸福に達つするだらう。

私は私の主人に仕へ機嫌を取る事を強いられないだらう、私は同等に何人とも話せるだらう、私は何人の許しも得ずに私の欲する處へ行く事が出来るだらう。

しかし彼がその幸福を與へられるや否や、直ちに、彼は食料を安全にするために何人かと好意を交へる事を求める。彼はこの目的のためにある輕蔑を止めんとする。そして、榮える人の周圍に自己を建設して、自分がそれから逃れる事をそんなにも最近に欲してゐた奴隷の身分に再び歸るのである。

若しかゝる人が榮えたならば彼は妾を畜へ、尙更に骨折りな束縛の状態に入る。彼が富豪になつた時にも彼は尙少しも自由を持たない。彼は苦しみ、哀しき聲を出し始める、そして格別に重荷を感じた瞬間には彼はその奴隷の身分の日を思ひ出して云ふのである。

『結局、私は私の主人からそんなに悪くあしらはれたのではない、私は悩みを持たなかつた。私は着物を着、靴をはき、食はされたのであつた。私の病氣だつた時には

私は看護された。そして私の勤務はそれ程きつくはなかつた。それに今私はどんなに多くの仕事をしなければならぬだらう。

嘗ては、私は一人の主人を持つてゐた。しかるに今私は澤山の主人を持つてゐる。

今、私はどんなにか澤山の人を楽しませねばならない事だらう！』

エビクテタス

二

肉體のむら氣は満ち足る事を知らない。

一、肉體の生活を支えるには殆んど要する程のものもない、しかし肉體のむら氣のためには際限がない。

二、肉體の要求は一肉體の要求のみは容易に滿される。特殊の不幸の場合に於て

のみ人は肉體を包む着物と、飢を慰する一片のパンとを缺くのである。しかし如何なる方も人の求むる一切のものを齎らせる事は出来ない。

三、無理な子供はその肉體の要求するものを與へられるまで叫び泣く。しかし肉體の必要とするものを與へられるや否や、それは靜かに歸し最早求めないのである。或人は、しかし、そうではない、若し彼等が肉體的生活を送り、精神の生活を送らないのなら。

かゝる人々は決して鎮靜せず常に何ものかを尙、求めてゐる。

四、肉體を氣任せにする事、過多のもの、その必要とする以上のものを給する事は憂ふべき誤りである。贅澤な生活の日課はよろこびを増すよりも、むしろ食物、娛樂、睡眠、衣服、住居を失はしめる。

若し、あなたが過度に珍味を食つたら、あなたの胃は狂はされ、あなたは食慾を失ひそれを味ふ事が出来なくなる。

あなたが歩いて行く事の出来る處へ馬を乗り、柔かな床や、珍味や高い香氣をつけた食物や贅澤な家具に自身を慣れさせたなら、自身する事の出来る事をあなたのために他人にさせる事を強ひる事を知つたなら、あなたは労働の後の休息、寒さの後の温さに喜びを感せず、熟睡を知らず、自身を弱くし、あなたの幸福や平和や自由の度を増す代りに減少する。

五、人々は動物からその肉體を如何に扱ふべきかを學ぶべきである。

動物はその肉體に必要なものを得るとすぐに靜かになる。しかし人はその飢を鎮める丈では満足しないで、天候から自身を護り自己を暖める。

即ち彼は一切の種類の美味な食物と飲料とを發明し、宮殿を建築し、美服と一切の種類の無用な贅澤を用意して最後に良く生活する事の代りに悪しき生活をする。

大食の罪

一、人々が若し飢えた時にのみ食し、その時、簡単な清潔な健全な食物のみを食すれば彼等は病氣を知らず、もつと容易に情熱に逆らふ事が出来るだらう。

二、賢人は云ふ、神に神が必要なものを得る事容易に、一切の過多なるものを得る事困難に、造つた事を感謝せよと。これは特に食物に就いて真である。人が健康のために働く事が出来るために、要求する食物は簡単な安價なものである、即ち、パンと木の實と根と水とである。此等一切のものは到る處に見出される。一切の美味なる種類のものを造る事のみが困難なのである。例へばアイスクリームその他である。

此等一切の珍味は整へる事が困難なるのみならず直接に有害である。それ故に、巧みに造つた美食を持つてゐる惱める富人を羨む事はパンと水と粥とを食ふ健康な人のなすべき事ではない、貧しきものを羨み、彼等の如く食事することを學ぶべき

は富人である。

三、飢餓のために死するものは殆んどない。多くのものが餘りに美食して働かないために死ぬるのである。

四、生きるために食ひ、食ふために生きる事勿れ。

五、『只一杯の肉或は菜一汁で健康には充分である』これは良い諺である。これに従つて生きよ。

六、若し鳥が食慾のためにでなかつたら捕鳥者の網の内で唸らないだらう、そして捕鳥者は一羽の鳥も捕へられないだらう。同じ唸り聲は人にもある。お腹は手と足との鎖である。お腹の奴隷はいつも奴隷である。若しあなたが自由ならんと欲するなら第一にお腹の主權を振り捨てなさい。それと戦ひなさい。飢を慰めるためにのみ食して、それから喜びを求むる事勿れ。

七、更に有益な事は毎週四時間をパンの製造に費し、それでその週の残りの時間

を生活するか、又は美味な嗜好料食物を製するため各週二十一時間を費す事である。更に良い事は何か、即ち十七時間で食物を得るか、美食を製するかである。

四

肉食の罪

一、ギリシヤの哲學者ピタゴラスは肉食をしなかつた。ピタゴラスの傳記者なる史家ブルタークは何故にピタゴラスは肉食を絶つたのかと聞かれた時彼は、自分はピタゴラスが肉食を絶つた事を不思議に思はない。人々が穀粒と草と果實とに依つて生活を支へ得るにも關らず、生ける生きものを捕へ、屠殺し、且つ食する事を固守する人々の尙残つてゐる事を不思議に思ふと答へた。

二、古代に於ては哲學者は人々に獸物の肉を食せざる事を、そして草を食する事

を教へた。しかし、人々は、哲人に何等の注意を拂はなかつた、そして肉食を固守した。

しかし、我々の時代では肉食を罪ありと考へ、肉食を絶つ人々の數が遽かに激増しつゝある。我々は殺されたる人の肉を食する人々を見出し、かゝる野蠻人が今尙アフリカに残つてゐる事を聞いて驚くのである。

人々が肉を食するためには獸物を殺した事を聞いて我々が驚く時がやつて来るだらう。

三、十年の間牝牛は汝と汝の子供とを育て、羊はその羽毛を以つて汝を温めた。彼等は何を以て報いられるのだらう。その喉を切り、食ひ盡される事である。

四、殺すべからず——これは人間を殺す事のみを指さずして亦一切の生ける生きものをも指してゐるのである。この律法はシナイの山に於て板に彫られる以前に人